

この商才無しの店主に
幽霊を！

漆黒のマツハチエイサー

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ウイズ魔道具店の店主、ウイズを追ってアクセルの街にやってきた新米冒険者、ライはひよんなことから仮面ライダーゴーストとなる力を手に入れてしまう。この力で憧れのウイズを守ることが出来ると心を踊らせるライ。果たして、ライがリッチーであるウイズを守る展開が訪れることはあるのだろうか？

この小説は「このすば」と「仮面ライダーゴースト」のクロスオーバー作品です。

目次

プロローグ	1	パー!	78
オリキャラ紹介(随時更新)	5	第六話 電気と雪崩とかき氷	95
ああ、駄女神様		第七話 対決!桶狭間!	112
第一話 開眼!俺が幽霊?	9	クリスマス特別編 独走!サンタク	132
第二話 衝突!水の女神!?	29	ロース!	147
第三話 召喚!異世界の英雄!	45	第八話 精霊・幽霊・2018	166
第四話 壮絶!魔王戦の裏側!	59	第九話 夢のまた夢	186
中二病でも魔女がしたい!		第十話 ピンクの悪魔	186
第五話 交換!二つのパーティーメン			

プロローグ

「リッチーがこんなところにノコノコ出てくるとは不屈きな！成敗してやる！」

リッチー。それは、ヴァンパイアと並ぶ、アンデッドの最高峰。魔法を極めた偉大な魔法使いが、魔道の奥義により人間を辞めた姿。通称ノーライフキング。簡潔にいうとアンデッドの王のような存在……らしい。

「やめやめ、やめてえええええええ！誰なの!?!いきなり現れて、なぜ私の魔法陣を壊そうとするの!?!やめて！やめてください！」

街から外れた丘の上。

そこには、お金のない人達がまとめて埋葬される共同墓地がある。

俺達はその墓地に発生したゾンビメーカー討伐のクエストを受けていた。

そしてゾンビを発生させていた元凶と思われる者は今。俺、サトウカズマが転生

者特典として連れてきた駄女神―魔法陣をぐりぐりと足で消そうとするアクアの腰に、泣きながらしがみついていた。

「黙りなさいアンデッド! どうせこの怪しげな魔法陣でろくでもないこと企んでるんでしょ!」

「やめてーやめてー! この魔法陣は成仏出来ない迷える魂を天に返してあげてるんです! 見てください! 沢山の魂が天に昇っていつてるでしょ!」

なるほど、見れば確かにそのようだ。

だが、アクアはそれがむしろ気に触ったようで。

「アンデッドの癖に生意気よ! そんな善行は私がやるから、あんたは引っ込んでなさい! 見てなさいよ! 私が墓地ごと浄化してやろうじゃないの!」

「えっちよつと待っ」

リッチーの静止も聞かずにアクアが手を広げ、大声で叫ぶ。

『ターンアンデッド』ー！』

墓場全体がアクアを中心に白い光に包まれ、周辺のゾンビ達の存在を消失させる。

その光はもちろんアクアにリッチーと呼ばれた黒いローブの女性にも及び、徐々にその身体が薄くなっていった。

「やめてええええええええええ！消えちゃう、私消えてなくなっちゃう！やめて、誰か助けてええええええええええ！」

そんなリッチーの声が届いたのか。

勝ち誇ったように高笑いするアクアの腹に、どこからともなく高速で飛んできた「何か」が潜り込んだ。

アクアが「ぐえ！」という、女神らしくも、女らしくもない声を出しながら弾け飛ぶ。

アクアを弾き飛ばしたその正体は、黒ベースにオレンジのラインが施されたパーカー。

自由自在に浮遊するそれは墓地を飛び回り…いつからかリッチーと俺達の間
いた誰か…いや、“何か”にまわりつく。

『レッツゴー！覚悟！ゴゴゴ・ゴースト！』

俺達からリッチーを守るかのように目の前に立ちはだかったそれは頭からフ
ドを外し、一本の角を持ったその顔を顕にする。

墓地に鳴り響いた軽快な機械音とは裏腹に…その浮遊する存在は不気味なオー
ラを放っていた。

オリキヤラ紹介（随時更新）

【登場人物】

ライ／仮面ライダーゴースト

今作の主人公。16歳になって冒険者になることを許され、アクセルでの初クエストで命を落とすが、現世への心残りから日本からの転生者、タケルの所持していたゴースト眼魂にその魂が宿り、ゴーストとして現世に残った。一緒に死んだタケルの遺品であるゴーストドライバーを使用して仮面ライダーゴーストに変身する。

タケル（偽名）

日本からの転生者。ゴースト眼魂とゴーストドライバーを転生者特典として貰い、このすばの世界に転生してきたが、説明書を読まなかったことでゴーストドライバーの使い方が分からず、第一話にて命を落とした。

【ゴースト眼魂】

オレゴースト眼魂

第一話で命を落としたライの魂が宿った眼魂。使用することで、基本形態 仮面ライ

ダーゴースト オレ魂に変身することが出来る。

エジソンゴースト眼魂

偉人、エジソンの魂が宿った眼魂。

ナンバリングは02。ベースカラーは黄色。

第四話より登場。変身後は電気を操ることが出来る。

変身音声は『エレキ、ヒラメキ、発明王！』

ロビンゴースト眼魂

偉人、ロビンフッドの魂が宿った眼魂。

ナンバリングは03。ベースカラーは緑。

第三話より登場。変身後はガンガンセイバー 弓モードを用いた戦闘スタイルを得

意とする。四体まで分身することが出来る。

変身音声は『ハロー！アロー！アロー！森で会おう！』

ニュートンゴースト眼魂

偉人、ニュートンの魂が宿った眼魂。

ナンバリングは04。ベースカラーは青。

第四話より登場。変身後は左手で引力、右手で斥力を操ることが出来る。

変身音声は『りんごが落下！引き寄せまっかー！』

ベンケイゴースト眼魂

偉人、ベンケイの魂が宿った眼魂。

ナンバリングは07。ベースカラーは白。

第三話より登場。様々な武器を使用して戦うが、ライはガンガンセイバーハンマーモードを好んで使う。怪力が持ち味。

だが、脛の防御力は下がる。

変身音声は『アニキ！ムキムキ！仁王立ち！』

ノブナガゴースト眼魂

偉人、ノブナガの魂が宿った眼魂。

ナンバリングは12。ベースカラーは紫。

第七話より登場。ガンガンハンド銃モードを主に用いた戦力スタイルを取る。武器を複製することが可能。

変身音声は『俺の生き様！桶狭間！』

サンタ魂

サンタクローズの魂が宿った眼魂。

ナンバリングはX。ベースカラーは…多分赤。緑や白も混ぜる。

クリスマス特別編にて登場。背負った大きな袋からプレゼントや爆弾を出すことが出来るが……？

変身音声は『ジングルベル！星降る！聖なる夜！』

ああ、駄女神様

第一話 開眼！俺が幽霊？

「あなた、ゲームは好きでしょ？」

目の前の青い髪をした女神様がそう囁く。

なんでも、若くして死んでしまった不幸な人間を任意で異世界に送ることになって
いるらしい。

そう、つまり俺は齢18にして日本での人生をもう終えてしまったらしい。な
んてこった、こんなことならもっとやりたいことをやっておけばよかった、と軽く後悔
する。

しかし重要なのは今、この瞬間だ。そして俺には…幸運なことにまだ未来がある
らしい。

「えっと、異世界語とかは?ちゃんと喋れるようにしてくれるんですよね?」

「もちろん、脳に負荷をかけて一瞬で向こうの言葉を習得させてから送り出す決まりよ。運が悪いとパーになっちゃうかもだけど」

「いま運が悪いとパーになるって」

「言つてない」

「言いましたよね」

「言つてない」

絶対言つた。まあいいだろう、ハイリスクハイリターンだ。こうして俺は異世界行きを決意した。

「それで、行つてもらおうのはいんだけどすぐ死なれちゃ送り出す意味がないから、何か一つ好きな物をなんでも持つていってもらおうことが出来るのよ!何か特殊な能力でもいいし、強い装備でもいいわ。何か一つ、あなたの望むものをなんでもひとつだけ与えます」

望むものをなんでも、か。すぐにとあるものが思いついた。やれやれ、これも特撮好きの性つてやつか：

俺はそれを目の前の女神に告げる。

俺はそれを女神から受け取り、そして、異世界への扉が開かれた。

「向こうに行ったら、アクシズ教をよろしくね！」

女神様の言葉を背に受けながら、俺は胸を高鳴らせていた。日本での生活に後悔はいくらでもあるが、そんなものを引きずる俺ではなかった。そして、別に異世界で活躍したいわけでもなかったし、生きることに対する執着も特にならない。

これは、いわばボーナスステージだ。もしかしたら一日で死ぬかもしれないし、もしかしたら魔王を倒すかもしれない。どうか、この転生者特典なら絶対に死ぬことはないのかもしれない。でも、そんなことはどうでもいい。

この俺が変身出来るという期待。このゴーストドライバーで仮面ライダーゴーストになれるという期待に、それだけに心を踊らせていた。

せつかくだ、名前も変えるとするか。向こうではきつとタケルと名乗ろう。

そんなことを考えながら、俺は異世界へと旅立った。

~~~~~

ここは始まりの街、アクセル。

冒険者になったばかりの人達はここでクエストをこなし、力を付けてから冒険の旅に出る。そんな街だ。

そんな街のとある店の前で俺は…店に入るでもなく、ただうろちよろしていた。

この店はウイズ魔道具店、その名の通りいろいろな魔道具を売っている店だ。

店主はウイズという二十歳ほどの女性で、凄腕の魔法使いだったらしい。

そして、ウイズさんは俺の憧れの人もあった。

俺の名はライ。 齢16にしてやっと冒険者になることが許され、新米冒険者としてこのアクセルの街にやってきた。



とは言っても、この場合の冒険者は職としての冒険者を指す。別に他の職に就けなかつたわけではない。

なんといつても、俺の特技は狙撃。なろうと思えば狙撃手にもなれたが、もし、もし仮にだぞ？俺がウイズさんとパーテーイーを組むようなことがあつたとして、後衛が二人いるより俺が前衛であつた方がバランスが取れる。そんな思いもあり、とりあえず最弱職についてみたわけだが：

果たして、俺は最弱職の新米冒険者のまま憧れの人と再会して本当にいいのだろうか。

俺は自分が女の人から好かれていると思ひ込むような自意識過剰な男ではない。ウイズさんはきつと俺のことをどうとも思っていないだろうことくらい簡単に想像がつく。だから最弱職の新米冒険者のまま顔を見せたところで幻滅されるようなことなどないとは思うのだが：

それでも。彼女は元凄腕魔法使い。そんな彼女の前にレベル1のままノコノコ

出ていくなんてことがあつては男がすたる。

そんなことを脳内でまとめた俺は、冒険者ギルドに向かうことにした。

簡単な装備を身につけ、無事パーティ結成をすることが出来た俺は、早速初クエストに挑むことになった。

パーティ編成は俺と同じ最弱職の新米冒険者が一人。名はタケルと言うらしい。

身につけているのは俺とほぼ同じような簡単な装備だが、ひとつだけ俺と違うものがあつた。

それは腰に付けた謎の装備。パツと見は目玉のような形状をしている。大きくて邪魔そうだったが、タケル曰く『ゴーストドライバー』と呼ばれるこの装備が彼を大きく強化させてくれるアイテムだそうぞ。

そのゴーストドライバーをはじめ、眼魂やら世界偉人録やら戦闘に使うらしい装備を一式見せてもらったが、どんな使い方をするのかと聞くと「クエストに行つてから

のお楽しみだ」と自信満々で飛び出して行ってしまった。

今回のクエストは街の近くに沸いたゴブリンの討伐。この程度なら新米冒険者2人でもなんとかなるだろう。

今はその道中。

タケルの懐から、何かの紙がひらひらとこぼれ落ちる。

「おいタケル、なんか落としたぞ」

「ん？ああ、ゴーストドライバーの説明書か」

俺から受け取るやいなや、タケルはそれをくしゃくしゃに丸めて道に投げ捨てた。

「おい、それ捨てて大丈夫なのかよ？」

「問題ねえよ、説明書を読まないのが俺のプレイングスタイルだ」

何やら訳の分からないことを言い出したタケル。

自信満々なその背中を見て、俺は一種の不安感を覚えた。

目的地に着くと、聞いていた通り岩場に小さなゴブリンの群れがあつた。数は10体ほど。遠距離攻撃してくる奴には注意が必要だが、まあ囲まれなければなんとかなるだろう。俺は腰に付けていたダガーナイフを手取る。

大丈夫だ、初期スキルポイントは片手剣スキルに使った。安物のナイフだが、ゴブリンごとき、簡単に切り伏せることが出来るだろう。

もしナイフが駄目になったとしても、ちゃんと予備は持ってきた。

心を落ち着け、俺は小声でタケルに話しかける。

「タケル、お前はあっち側に回り込んでくれ。挟み撃ちにー」

そこまで言った時だった。タケルがおもむろに飛び出したのだ。ゴブリンが一齐にこちらを向く。

「ちよ、何を」

「まあ俺に任せとけつて！」

そう言つてタケルは懐から白い球体の、先ほど眼魂と呼んでいたものを取り出し、右手でそれを持つて左手の平で側面の突起を押し込む。どうやらそれがボタンのようだが……

それは、なんの反応も示さなかつた。

「!?何故だ！」

何度もボタンを押すが、それに反応はない。

だが今はそんなことをしている場合ではない、ゴブリン達が次々と襲い掛かつてくる！

俺は一匹が振りかざした棍棒をかううじて避け、その脇腹を切り伏せる。

「おいタケル、今それを使うのを諦めろ、ゴブリンをなんとかするぞ!」  
「これがあると思つてたから武器は持つてきてねえんだよ!」

マジかよ!

タケルはゴブリン達の攻撃を器用に避けながら、眼魂をゴーストドライバーに装填していた。お前そんな身体能力高いなら普通の武器で十分戦えたぞ!

タケルはゴーストドライバーの右に付いているレバーを押し引きするが、それもドライバーは何の反応もない。

なんでお前さつき説明書捨てたんだよ!

タケルの背後にゴブリンが回り込み、木の棒を振りかぶる。

俺は咄嗟に予備のダガーナイフを投げ、叫んだ。身体能力の高いタケルなら、咄嗟に避けられるだろうと。

「しゃがめタケル!」

ダガーはまっすぐタケルの元へ飛んでいった。タケルが避けさえすれば、タケル

を狙っていたゴブリンの頭を貫ける軌道だった。しかしその時のタケルは、ドライバーが起動しないことに焦っていた。注意が散漫になっていたのだろう。

「え…？」

タケルは避けず、ダガーがゴブリンに迫り着くことはなかった。

俺の放ったダガーはタケルの胸に突き刺さり、その上、タケルは後頭部をゴブリンに強打されていた。

タケルはその場に倒れ伏した。

倒れた衝撃で俺のダガーがより深く刺さったのだろう、背中から赤く光るナイフの先が少し出ている。

タケルはこれをどうやって使おうとしていたのだろうか、白い眼魂を装填したままのゴーストドライバーがタケルの腰から外れ、転がっていた。

「タケル!」

俺はタケルの元へ駆け付けようとする。今ならまだ間に合うかもしれない。助かるかもしれない。

そして俺は、周囲にあと5匹も残っているゴブリンのことを完全に視界から消し去っていた。

自分の左側から微かにヒュツという音がした。

俺が頭を音がした方向に向けた時、

矢は既に目の前まで迫っていた。

完全に自分のミスだ。

俺がタケルに向かってダガーを投げなければタケルが死ぬことはなかった。

どのみちゴブリンの攻撃はタケルに当たったのかもしれないが、タケルを殺した決定打はきつと俺のダガーだった。

タケルが倒れた時に俺のダガーが深く刺さっていないならば、きつとアイツはまだ



生きていた。

タケルへの後悔だけじゃない。タケルが倒れた時だって、俺がちゃんとゴブリンを見ていたら、あの攻撃を受けることもなかっただろう。

俺は、一番警戒していたはずの弓矢にやられたんだ。

俺は…死ぬのか？死ぬんだろうな。ここに都合良く他の冒険者が通りすがってくれるなんてありえない。

俺は…一度ウイズさんに助けてもらった命を…無駄にしたんだな。

絶対ウイズさんには恩返しをしたいと思っていたのに。

いや…恩返しなんて大層なものじゃない。ただあの時からウイズさんに魅入られて…あの人の近くにいたいと思っただけだった。

俺はそのためにアクセルの街に来たんだ。

こんなことになるなら、さっさと会っておけばよかった。

…こんなところで死にたくない。

俺は、もう一度ウイズさんに会いたい。話がしたい。あの笑顔をもう一度見たい。  
い。

願わくば…あの笑顔をこの手で守りたい。

俺はウイズさんに、もう一度…

生きたい、と思う気持ちが最高潮に達したその時、俺の視界はもう一度開かれた。

それは、初めはぼやけた視界だったが、徐々にはつきりしてきた。

うつ伏せに倒れたままのタケルと、頭に矢が刺さり、タケルの近くで倒れている俺、そしてその屍の周りを生き残った五匹のゴブリンが囲んでいる。

俺は…自分がさっきまで戦っていたその場所を、上から見下ろしていた。

ということは、やはり俺は死んだのか…

と、考える間もなく。

俺の視線は、落ちていたゴーストドライバーの放つ光に釘付けになった。

謎の光に、意識まで吸い寄せられるような感覚がする。なんだろうこの光は。すると、たちまち俺の死体が光の粒子となり、ゴーストドライバーに吸い込まれていく。

不思議なことはまだ続く。ゴーストドライバーの中に装填されたままの白い眼魂が輝きを増し、黒っぽい球体へと姿を変えていた。

それと共に、俺の意識までもが本当にドライバーに吸い寄せられ：

次に目を開けた時には、俺はゴーストドライバーが落ちていたはずのところにつけて立っていたのだった。

俺の死体がなくなったことに困惑するも、すぐに俺を見つけて威嚇するゴブリン達。

腰に軽い違和感を覚えて見てみると、そこにはタケルのゴーストドライバーが巻きついていていた。

先ほど黒く変わっていた眼魂はゴーストドライバーから飛び出し、俺の手の中に収まる。

眼魂は先ほどまでの白い姿よりいつそう目玉に近づいた形状をしていた。

もしかして、これが眼魂の本来の姿なのではないだろうか。この状態なら、この道具を使用することが出来るかもしれない。

そう思った俺は、黒い眼魂を両手で構え、タケルがやっていたように左手の平でボタンを押した。

俺はタケルの動きを思い出しながら、ゴーストドライバーに眼魂をセットし、カバールを閉じて右サイドのレバールを引く。

『アーイー!バツチリミナー!バツチリミナー!』

どこかふざけた機械音と共にゴーストドライバーから何か勢いよく飛び出し、ゴブリン達を弾き飛ばす。

やっぱりだ!これが本来の使い方!

俺は胸を高鳴らせながら、ドライバーのレバールを力強く押し戻す。

『開眼！オレ！レッツゴー！覚悟！ゴゴゴ・ゴースト！』

最早喧嘩を売っているかのような音声と共に、上から先ほどの何かが覆い被さる。

俺が着たそれは、黒とオレンジの、一般的に『パーカー』と呼ばれているもの。

正面の五匹のゴブリン達はしばし目をぱちくりさせたが、直ぐに棍棒をふりかざしてくる。

咄嗟に左腕で防いでしまった俺に、ダメージはない。本来なら腕が折れていたであろうその攻撃は、俺の腕に軽い衝撃を与えただけで終わったのだ。

その時、初めて自分の身体がどうなっているかを知る。

目に映った自分の腕は黒いアーマーに覆われている。全身が同じ鎧を纏ったような状態だったが、通常の鎧を着ているような動きのしづらさ、違和感などは全くと言っていいほどない。

顔を触ってみると、額には一本の角らしきものが伸びていた。

あと、フードは脱げるようだな。邪魔になりそうだから良かった。

迫ってきていた目の前のゴブリンの一撃を躲す。それは軽く飛びのいただけのつもり。なのに、身体はその場で浮遊していた。

「俺…どうなったんだ!?!」

次々と俺を襲う新しい感覚。俺は混乱した。だが、それは後でいい。まずはあのゴブリンを…

「えっと、武器武器…」

すると、また不思議なことが起こった。気づくと、ドライバーから剣が生成されている。

よくわからないが、これでゴブリンを倒せる!

俺は浮遊したまま、空中からゴブリンを切りつける。一匹、二匹倒した。

「つと、危ねえ！」

遠くからゴブリンが飛ばした矢を剣で受け止める。

そして、何かを感じた俺は手に持っていた剣の、柄と刃の境界あたりから折り曲げた。

この形状は…

俺が折り曲げた剣の先をゴブリンに向け、柄に付いていたトリガーを引くと、剣の先から何かが発射され、ゴブリンを一撃で仕留めた。

なんだ、これ。矢を飛ばしたのではなさそうだが…トリガーを引くだけで玉を飛ばせるパチンコのようなものか…

残るはあと二体。どうやって倒すか…

しかしこのゴーストドライバー。まだ隠された機能があるんじゃないのか？ふと、そんなことを思い立った俺は、試してみることにした。

地上に降り立ち、迫って来る二匹のゴブリンを待ち受ける。

俺はすかさず、ドライバーのレバーをもう一度引いて、押す。

『ダイカイガン!オレ!オメガドライブ!』

俺と意思とは別に俺の身体は自然と浮遊し、左足が熱くなる。瞬時に全てを理解した俺は、左足に集まる強いオーラを受け入れ、はるか上空から敵に向けて渾身の足蹴りを放った。

ドライバーから眼魂を取り出し、この奇妙な変身を解除させた俺は冒険者カードにゴブリンの討伐数が記載されたことを確認し、帰路につく。俺は確かに一度死んだはず。ならばアンデッドにでもなったのだろうか?もしくは霊のようなものか、浮遊出来たし。だが、実体はちゃんとある:これが眼魂の力か。わからないことだらけだが、これならちゃんと街で生きていくことが出来そうだ。

帰ったらずは、ウイズさんに会いに行こう。自分がいつ死んだとしても、後悔しないでいられるように。



## 第二話 衝突！水の女神!?

今日の初クエストで死に（？）、一度耐え難い後悔を経験した俺、ライは、明日ウイズさんのお店を訪問することにした。

出来れば今日のうちにウイズさんに再会しなかったのだが、クエストから帰り、ギルドから報酬を受け取った頃にはもう夜中。店もやってないだろうし、こんな時間に訪問すると迷惑になるだけだろう。

今日は馬小屋で寝ることにして、続きはまた明日：

…寝れない。

あんなに動いた後だということにちっとも眠くならない。そして、不思議と疲労もないことに今気づく。

まあ、俺が死んで幽霊になったというのならそれも当たり前のことなのかもしれないな。

俺は仕方なく、寝静まった街を徘徊することにした。

街へと繰り出した俺は人目がないのをいいことに浮遊し、空中を暴れまくる。しば

らく暴れ回ったからか、結構コツが掴めてきたようだ。

どうやら俺は浮遊だけじゃなく、身体を透けることも出来るようだ。本格的に幽霊。

と、そこに見えてきたのはウイズ魔道具店。

…あれっ。

これ俺、身体を透過させて家に入って、ウイズさんの寝顔を拝むことなんかも出来ちゃうんじゃ…

そんなイケないことを考えついてしまい、良心と悪心の間で頭を抱えていると、急に店のドアが開き、黒いローブを身に纏ったウイズさんが出てきた。

咄嗟に隠れてしまった俺に気づくことなく、ウイズさんはそのままそくさど何処かへ向かっていく。

今は真夜中、午前二時前といったところ。

ーこんな夜中に何を?

不審に思った俺は、ウイズさんの後をつけてみることにした。

くくくくくくくくくくくくくくくく

俺はサトウカズマ。日本で若くして不幸な死を遂げ、水の駄女神アクアを転生者特典として選び、この世界に転生した冒険者だ。

そこにめぐみん、ダクネスを迎え入れた俺のパーティは今、墓地に出るゾンビメーカー討伐のクエストに挑戦している。

めぐみんは、生まれつきにしてアークウイザードの素質を持つという紅魔族で、職業は勿論アークウイザード。だがスキルは爆裂魔法しか取っておらず、高火力の必殺技を一日一度撃てるだけのロリっ子だ。

ダクネスは職業、クルセイダーで、防御力に関してはかなりのももののだが、全くと言っていいほど攻撃が当たらない。更にDM属性も所持しており、自分から攻撃を受けに行ってしまうのは本当にやめて欲しい。

そして俺が転生者特典として連れてきた駄女神アクア。ステータスが全面的に高く、蘇生魔法さえ使いこなすアークプリーストだが、知力が絶望的に低い。

「ちよつとカズマ、今私に失礼なこと考えてなかった？」  
「考えてない」

こういう時だけ妙に勘が鋭いんだよなあ、コイツは。

時間は午前二時を過ぎた頃。そろそろ頃合いだと思い、俺達は墓地に向かってい

た。

「冷えて来たわね…。ねえ、受けたクエストってゾンビメーカー討伐よね?私、そんな雑魚よりもっと大物が出そうな予感がするんですけど…」

アクアが不安になることを口走る。

「おい、そんなフラグピンピンなことを言うな。いいか、今日はゾンビメーカーの討伐、そして取り巻きのゾンビもちゃんと土に還す。んで帰って寝る。もしイレギュラーが起きたらすぐにトンズラする。わかったな?」

そう言うと、皆こくりと頷いた。

墓地へと進んでいくと、俺の敵感知スキルが何かピリピリ感じ出した。

「何か敵感知に引っかけたな、いるぞ、一体、二体、三体、4体…?」

あれ、多いな?

ゾンビメーカーの取り巻きはせいぜい二、三体って聞いてたが…まあ誤差の範囲だろう。

そんなことを考えていると、墓場の中央で青白い光が走った。

それは、妖しくも幻想的な青い光。

遠くに見えたのは、大きな円形の魔法陣で…

その隣には、黒い人影のローブが見えた。

「…あれはゾンビメーカー…ではない…気が…するのですが…」

めぐみんが自信なさげに呟いた。

「突っ込むか？ゾンビメーカーじゃなかったとしても、こんな時間に墓場にいる以上はアンデッドに間違いないだろう？ならアークプリーストのアクアがいれば…」

「あ—————！」

アクアが俺の声を遮って、とんでもない行動に出る。

突然叫んだアクアは、何を思ったのか立ち上がり、そのままローブの人影に向かって走り出す。

「ちよっ！おい待て！」

俺の制止も聞かずに飛び出して言ったアクアはローブの人影に駆け寄ると、ビシツと人影を指さした。

「リッチーがこんなところにノコノコ出てくるとは不屈きな！成敗してやる！」

リッチー。それは、ヴァンパイアと並ぶ、アンデッドの最高峰。魔法を極めた偉大な魔法使いが、魔道の奥義により人間を辞めた姿。通称ノーライフキング。簡潔にいう

とアンデッドの王のような存在。

そんな、超大物モンスターが今…

「やめやめ、やめてええええええええ！誰なの?!いきなり現れて、なぜ私の魔法陣を壊そうとするの?!やめて！やめてください！」

魔法陣をぐりぐりと足で消そうとするアクアの腰に、泣きながらしがみついていた。

アクアはリツチーだと言いつ張っているが、俺にはこの人がただのいじめられっ子にしか見えない。

「黙りなさいアンデッド！どうせこの怪しげな魔法陣でろくでもないこと企んでるんでしょ！」

「やめてーやめてー！この魔法陣は成仏出来ない迷える魂を天に返してあげているんです！見てください！沢山の魂が天に昇っていつてるでしょ!?!」

なるほど、見れば確かにそのようだ。

だが、アクアはそれがむしろ気に触ったようだ。

「アンデッドの癖に生意気よ！そんな善行は私がやるから、あんたは引つ込んでなさい！見てなさいよ！私が墓地ごと浄化してやろうじゃないの！」

「えっちよつと待つ」

リッチーの静止も聞かずにアクアが手を広げ、大声で叫ぶ。

『ターナンデッド』ー！』

墓場全体がアクアを中心に白い光に包まれ、周辺のゾンビ達の存在を消失させる。

その光はもちろんアクアにリッチーと呼ばれた黒いローブの女性にも及び、徐々にその身体が薄くなっていった。

「やめてええええええええ！消えちゃう、私消えてなくなっちゃう！やめて、誰か助けてええええええええ！」

いいことをしていたというこの人をこのままアクアに浄化させるのがちよつと可哀想になってきた俺が、アクアに止めさせようとしたその時。

そんなリッチーの声が届いたのか。

勝ち誇つたように高笑いするアクアの腹に、どこからともなく高速で飛んできた、何か“が潜り込んだ。

アクアが「ぐえ！」という、女神らしくも、そもそも女らしくもない声を出しながら弾け飛ぶ。

アクアを弾き飛ばしたその正体は、黒ベースにオレンジのラインが施されたパーカー。

自由自在に浮遊するそれは墓地を飛び回り…いつからかリッチーと俺達の間にい

た誰か…いや、何か”にまとわりつく。

『レッツゴー!覚悟!ゴゴゴ・ゴースト!』

俺達からリッチーを守るかのように目の前に立ちはだかったそれは頭からフードを外し、一本の角を持ったその顔を颯にする。

「大丈夫ですか、ウィズさん?」

オレンジ色に光るその顔は、背後のリッチーを顔を向け、そんな声をかけた。

「え、ええ、なんとか…」

ターンアンデッドから解放されたリッチー…ウィズと呼ばれた彼女は、唐突な救世主の登場に困惑している。

「何なのよあんた!一介のゴーストが女神である私に牙を向いて、タダで済むと思わな  
いことね!」

「ふえつちよつ…!」

『セイクリッド・ターンアンデッド』ー!」

「うわあああああー!」

パーカーに殴り飛ばされ、敵意MAXのアクアのターンアンデッドは確かにそれに命中したはずだった。しかし。

本来なら、通常のターンアンデッドで倒せるであろう、アクアにとってそこまで強



い敵ではないはずのゴースト。

「…効いてない?」

それは、ゴースト自身が発した言葉。彼にとつても、これは予想外だったのだろう。アクアの攻撃を受けたそのゴーストにダメージはない。

「…あなた、よく見たら私が前に送り出した転生者じゃない?」

ターンアンデッドが効くはずの敵に効かず、驚いたように相手を見ていたアクアがそんなことを。

…今、なんつった?

「おい、どういうことだ? 確かにお前が送り出した転生者なのか?」

「間違いないわよ、いつもは送り出した人のことなんてわざわざ覚えてないけど、カズマに連れてかれる直前に送った人だからまあまあ覚えてるわ。あのオレンジ色の鎧は間違いない。仮面ライダーゴーストだもの。ねえ、あなたも覚えてるでしょ? あなたをこの世界に転生させた水の女神アクアよ? ほら、分かったらそこをどきなさいな、そのリッチー浄化するから」

だが、仮面ライダーゴーストと呼ばれたその人はキョトン、とした様子で。

「…俺は君に会った記憶はないけど?」

そう言って変身を解除させた。その素顔を見たアクアが叫ぶ。

「あんた誰よ!」

おい。

「俺はライだ、覚えとけ。それより、どういうことだ? ウイズさんがリッチーナわけないだろ、適当言うんじゃないよ」

「あ、あの…」

そう言つてアクアからウイズを庇うライに、ウイズが申し訳なさそうに。

「すみません私、実はリッチーだったりしちゃうんです…」

「は……………」

ウイズが、本当に申し訳なさそうにそんな告白を―

~~~~~

「本当にすみませんでした。別に騙すつもりではなかったんですが…」

時刻は午前三時頃。

墓場で冒険者達に襲われていたウイズさんを助けた際に、ウイズさんが実はリッチーだったという衝撃告白を聞いてから30分程が経つ。

あの後結局、ウイズさんは今まで人に危害を加えたことはない、ということでも冒険

者達には見逃してもらえないことに。

あのアークプリーストはゴーストドライバーを知っているようで、後日詳しく話をしてもらったことになった。

夜も遅いのでとりあえず解散、馬小屋に戻ったところで眠くならない俺はウイズさんを家まで送り届けることにしていた。

「別にいいですよ、気持ちの整理もつきましたし。リッチーであることなんて明かしたら街で暮らしていけなくなるかもしれないかもしれませんもんね。でもリッチーだなんて凄いいじゃないですか、俺なんかゴーストですよゴースト」

「そんなことないですよ。というか、ライさんもこの街に来てたんですね」

「まあ、駆け出し冒険者ですし」

ウイズさんとの他愛ない会話。俺はウイズさんがリッチーだということを知らされて尚、自分の気持ちが変わらないことを実感していた。というか、俺もゴーストだし。ならば、やることはひとつ！

「あの、ウイズさんっ！俺をつ！ウイズさんの店で働かせてください！」

「ライさん!?あの、えつと…申し訳ないのですが…今私のお店にはバイト代を出せるほどのお金が…」

「ならバイト代はいりません！ウイズさんのお手伝いさえ出来れば！」

「えっ、えっと、それはさすがにちよっと」

「遠慮はいりません!ウイズさんの近くにいたいだけなので」

なんかナチュラルに告ってしまった気もするが、気のせいだろう。

しばしの沈黙が走る。頭を下げているのでウイズさんの表情は見えないが、多分困っているのだろう。もうちよっといい交渉の仕方があったかもしれないと若干後悔しつつも、俺はおそるおそる顔を上げた。

すると、ウイズさんが何かを思いついたように手をたたく。

「そうだ、お手伝いしていただく代わりにうちに住みませんか?」

…うちに?

それはつまり、ウイズさんとひとつ屋根の下で生活を…

この魅力的な提案に、俺は喜んで乗ることにした。

「では、ライさんのお部屋は掃除しておくのでお昼頃にまた来てくださいね」

ウイズさんを家まで送り届けた俺はウイズさんに背を向け、荷物をまとめるために馬小屋に戻ろうと…

「ライさん…」

したところに、30秒前に別れたはずのウイズさんの声が背後から聞こえてきた。

「店に結界が張ってあつて入れません…」

ウイズさんが涙目でそんなことを。

もしやと思い、辺りを見回すと…

「ブークスクス！ざまあないわねあのリッチー！」

道の曲がり角で笑っている、さっきのアークプリーストを、俺は剣を召喚し、瞬間移動して殴り飛ばした！

~~~~~

「なあ、拗ねてないで教えてくれよ。大体お前が悪いんだろ？」

あれから数日。俺はウイズの家に部屋を借り家賃の代わりに店を手伝うことになった。心優しいウイズは、食事も提供してくれる。ゴーストは本来食事をしなくても生きていけるのだが、せっかくだからご馳走になることにしている。

呼び捨てでいいとのことなので、喜んでウイズ、と呼ぶことにした。

そして今は魔道具店でこの前のアークプリースト、アクアにゴーストドライバーの話  
を聞いているのだが。

「だってコイツ、あろうことか女神であるこの私に剣で殴りかかってきたのよ!?それで

いて許せていう方がおかしいんじゃないかしら」

この前剣で殴り飛ばしたのを根に持つアクアは、いつまでも教えてくれないでいた。「そもそも、私が女神であることを信じてくれないんじゃないや話が進まないわよ」

そう、コイツは自分が女神であるとの、よく分からない主張を続けているのだ。そんなもの、信じろという方が馬鹿げている。

「先日のターンアンデッドの件で引つかかってたんですが、アクアさんって、本当に女神様だったりするんですか？」

アクアに言われるがままにせつせとお茶を用意していたウイズがそんなことを言う。

「だからさつきから言ってるじゃない。私はアクア、アクシズ教の崇める御神体、水の女神アクアよ!」

「ひいひい!」

それを聞き、怯えて俺の後ろに隠れるウイズ。

「そんなに怯えなくてもいいと思うぞ? まあ、女神とリッチーなんて水と油のような存在なんだろうけどさ」

そういつてカズマがウイズをなだめる。

「い、いえ、そうではなくて、頭がおかしい方が多いと評判のアクシズ教の元締めの方と聞いて…」

「なんですつってえ!？」

「ご、ごめんなさい!」

俺はいきり立つアクアから怯えるウイズをなだめる。怯えるウイズも萌えるが、それよりも。

「ていうことはウイズ、アクアが女神っていうのは本当なのか?」

「ええ、それなら私にターンアンデッドが聞いたことも納得がいきます」

なるほど。

「どうやらやつとライも信じたようね。じゃあ話を進めるわ。天界では今、他の世界で若くして死んだ人達をこの世界に送ることになってるの。送ってすぐに死なれちゃ困るから、なんでも欲しいものをひとつだけ与えてね。まあ、その特典として私はカズマに連れてこさせられちゃったからここにいますよ」

カズマがふいつと目を逸らす。何やってんだ。

「その特典として、転生させたところの子が持つてったのがそのゴーストドライバー、仮面ライダーになるためのアイテムのひとつよ。その子はゴーストを望んだから、そのドライバーで変身するとゴーストになれるようにしてあるの。とは言っても、オレ眼魂を発現させるには自分が1回死なないといけないから、それを発現させるのは推奨してないんだけど…」

「オレ眼魂ってこれか?なんだオレって。いや、俺は一人称オレだから間違ってるのかもしんないけど、もうちょいかっこいい名前なかったのか」

「考えたの私じゃないんだから、私に言わないでよ。それでね?もしかして、アナタが死んだ時に近くで同時にその子が死んじゃったりしたんじゃない?」

「よく分かったな、俺達はパーティ組んで一緒に死んだんだ」

「悲惨だな」

カズマがうるさい。

「眼魂は死んだ人の魂をその中に入れておくことが出来るのよ。それで、その場合基本は持ち主の魂の保存が優先されるはずなんだけど、多分アナタの方が生きることへの執着が強かったのね、それに呼応した眼魂がアナタの魂を保存しちやっただと思うわ」

「もうちょつといい言い方出来なかったのか?」

「出来なかったわ。あなた冒険者でしょ?他の人に見せてもらえばなんでもスキル習得出来るはずだから、誰かに召喚魔法を教えてもらってきてね。そしたらその力のもっと便利な使い方を教えてあげるからね」

そう言っただけでアキアは席を立った。



## 第三話 召喚！異世界の英雄！

召喚魔法を覚えろ、というアクアの言葉を元に、ウイズから召喚魔法を見せてもらった俺はスキルポイントを貯めるため、ジャイアントトード狩りに繰り出していた。

冒険者カードのスキル欄には、薄い文字で召喚魔法が表示されている。幸いにも、念の為初期スキルポイントを使わずにいた俺はあと一ポイントで召喚魔法を習得出来るようだ。

右に一匹、左に二匹。

仮面ライダーゴースト オレ魂と呼ばれる姿に変身した俺は、先日アクアに教わった通りに剣ーガンガンセイバーの目玉のマークをゴーストドライブにかざし、身体を軸にして集まってきたカエルを一度に切り伏せる！

『ダイカイガン！オメガブレイク！』

三匹のカエルはその場から動かなくなった。

~~~~~

「あら、早かったじゃない。召喚魔法は習得したかしら？じゃあ今からゴーストドライブの活用の仕方を教えてあげるわ！」

先ほどの戦闘でレベルも2つ上がり、召喚魔法を習得した俺は冒険者ギルドでアクア達と待ち合わせをしていた。カズマのパーティが勢揃いで席に腰掛けている。

本当はアクアだけで良かったんだが、みんな見たことのない道具が気になるらしい。俺はアクアと向かい合うように、めぐみんとダクネスの真ん中の席にお邪魔することにした。

「今回ご紹介するのはこちらー!」

アクアがそう言うって見せてくるのは、俺がゴーストドライバーと一緒に回収していた本。回収したはいいいが、何が書いてあるのかまるで読めなかつたのでとりあえず放置していた本だ。

「なに…世界偉人録?これがどうかしたつてののか?」

カズマがなんの気なく表記の文字を読む。

「そうか、お前も異邦人なんだもんな」

俺の言葉に理解できない、といった様子でめぐみんとダクネスが首を傾げた。どうやらこいつらには事情を話してないようだ。

「この本にはカズマのいた世界で何かを成し遂げた人物、偉人と呼ばれる人物のことが書いてあるの。これを読んでその偉人のことを学び、彼等に願うことで一時的に偉人の力を借りることが出来ちゃうのよ!…その表情を見た感じ、何言ってるのか分かってな

いっばいから実際に感じて理解してもらおうのがいいと思うの」

俺が理解していないことを察したアクアがそう言ってくれる。

「最初だし、派手なのがいいわね…あ、コイツとかどう？力もあるし、強いし派手じゃない？」

いい人を見つけたらしく、そのページを開いたまま俺に見せる。

「だから読めねえよ」

俺は机をバンツと叩き、一瞬怯んだ新鮮な野菜ステイックをつまんで齧る。

「どれ、俺が読んでやるよ」

俺の野菜ステイックに手を伸ばし、野菜ステイックにひよいつと逃げられていたカズマが世界偉人録に目を通し、語り始めたー

~~~~~

「さて。コイツのことちよつとは詳しくなつたんじゃないかしら。そしたら、このページに向かつて召喚魔法を使うのよ。上手く行けばパーカーゴーストが出てくるはずだから」

「さつきから偉人に向かつてコイツコイツってお前何様のつもりだよ」

「水の女神アクア様に決まってるじゃない」

「何言ってるんだ、水の女神より偉人の方が上に決まってるんじゃないか」

取っ組み合いを始めたカズマとアクアは無視し、俺はアクアに言われたことを試してみることにした。

「命を賭して闘ったと伝えられる異世界の偉人よ…今こそ、我にその力を分け与えよ！」  
その言葉に世界偉人録が震え、白く、空を自在に駆け回る一枚のパーカーが飛び出す！

取っ組み合っていたカズマ達もいつの間にか手を止め、目で追われていたそれは俺の付けていたゴーストドライバーに入り込み、ひとつの眼魂とその姿を変えた。

オレ眼魂と同型だが真っ白で、上部には7の数字が刻んである。

「これがベンケイ眼魂…」

「ライ！試し打ちなら、私と勝負してみるのはどうだ？」

俺は、何故か息を荒くするダクネスの提案に乗ることにした。

…他の三人が呆れたような顔をしているが、あえて無視してみることにした。

~~~~~

ギルドから出た、ちよつとした路地。

二人で軽く戦闘する分には十分かと思われるこの場所で、俺とダクネスの一騎討ちが始まる！

『アーイー！バッチリミナー！バッチリミナー！』

ダクネスと向かい合い、ゴーストドライバーにベンケイ眼魂をセットした。トリガーを引いて、押し込む！

『開眼！ベンケイ！アニキ！ムキムキ！仁王立ち！』

白き鬪志を身に纏った俺の姿は、仮面ライダーゴースト ベンケイ魂。

「さあ、どこからでもかかってこい！」

ガングンセイバーを構えた俺は、同じく大剣を持ち、顔を赤くさせて戦いに燃えるダクネスに攻撃を加えるタイミングをはかる。

すると、突然俺達の間にはひょこんと飛び出してきた小さな影。

よく見ると…クモ？いや、でもクモよりかデカイし…でもクモのモンスターにしてはちよつと小さいし…

そのクモは俺の方を見ると、そのまま飛びかかってきた！

「なっ…！何してるんだライ、逃げるのか貴様！」

「違う、勝負から逃げようとしてるんじゃないやなくて！クモ、この俺を追っかけてくるクモをなんとかしてくれええ！」

「ライ、落ち着いて！それはクモランタンって言ってあんたの味方よ！」

その言葉に逃げる足を止め、クモ…ランタンと向かい合った俺は。

コイツが…仲間？

「何見つめあつてるんですか、アクアもあれが何なのかちやんと説明してください!」

「あつ…そうね!えつと、ガンガンセイバーをNAGINATAモードにして!」

「訳分からんことを言うな、なんだそのNAGINATAってのは!」

「あ…えつと、じゃあガンガンセイバーの斬る部分を割って、持ち手のお尻同士をくっつけてみて!」

なんとか語彙力のない女神様の言う通りに、外れそうだった刃の一部分を外し、柄の先同士を付ける。

すると、クモランタンがガンガンセイバーに飛びかかり、刃の先にくっ付いた。

「うお、すげえ!」

「それがガンガンセイバー ハンマーモードよ!さあ、思う存分ダクネスをいじめなさいな!」

おお、これでダクネスをいじめることが…ん?

「アクア今お前ダクネスをいじめるって」

「気のせいじゃない?」

そつぽを向いたアクアがそんなことを言ってくる。まあ、ダクネスもそんなに弱くはないはず。

「では、私から行くぞライ!」

「えっちよっ！」

そう、前触れもなくいきなり突っ込んできたダクネスが、慌てる俺へ向かって大剣を振り上げ……！

大剣は俺の少し手前の地面を斬り裂いた。

「……ん？」

なんか知らんが、今がチャンス！

攻撃が空振りして隙だらけになっているダクネスのデカイ胸に、多少手加減した俺のハンマーが食い込んだ。

「なんか勝った気がしないが、勝負あったな」

俺はそう言ってその場を立ち去ろうと……

「何を言っている。私の防御力を舐めているのではないか？ 私にはまだ傷ひとつないぞ。そんな攻撃ではゴブリン一匹倒せやしないだろう」

ダクネスがそんなことを言ってきた。

「まったく、カズマの国の偉人の力まで借りておいてたったこれだけとは悲しいものだな……これならまだその辺のチンピラの方が」

「そこまで言うならやってやろうじゃねえか！ 吹っ飛んで大怪我しても知らねえからな！」

ダクネスの発言にイラツときた俺は全力でダクネスを殴るが、鎧が少し傷ついただけで、ダクネスはそれを簡単に受け止める。

上等だ、俺の本気を見せてやる!

俺はダクネスに次々と全力の攻撃を叩き込むが、まだまだ俺のレベルが足りないせいか、ダクネスは余裕そうな顔をしている。まるで「俺にはガツカリだ」と言わんばかりの顔を。

更にイラついた俺は、ガンガンセイバーの目玉のシンボルマークをゴーストドライブバーに近づける。

『ダイカイガン! オメガボンバー!』

ハンマーを地面に叩きつけ、発生させたベンケイの7つ道具を模したエネルギー弾を次々とダクネスに叩き込んだ。

しばらくすると、煙が晴れ、そこには鎧をボロボロにしながら赤い顔をした元気なダクネスが。

「んっ…やれば出来るじゃないかライ、それだ、その攻撃だ! さあ、もつとこい! もつと私を楽しませろ!」

そんなダクネスを見て俺は悟った。

そっかあ…こいつ、ただのDMだ。

勝負はダクネスの勝ちにして、俺は逃げるように帰った。

~~~~~

ダクネスとの決闘から数日。

俺はウイズの手伝いで、店の新商品の陳列をすることになった。

「すみません、ちよつと手を火傷してしまっていて」

「全然大丈夫だよ、家を貸してもらってる身だし。どうしたんだ？火傷だなんて」

「アクア様が朝のうちに店のドアノブに聖水をかけていったらしく、うっかりそれを触ってしまいました……」

「あの駄女神は今度シバいておくからな」

そんな話をしながら商品を箱から出していく俺達。見ると、面白そうな商品が沢山ある。

「しつかし魔道具店だなんて、本当に宝の宝庫だな。これはどんなポーションなんだ？」

「それは、服用するとアクセルの街全体を覆うほどの自爆が出来るポーションです」

「すごいな、魔王城に乗り込んでこれを飲むものなら自らの身を投げ打って魔王城を壊滅させることが出来る、まさに英雄になれる道具じゃねえか！それがたったの20万

エリス!?!破格じゃないか!」

「ですよね!ですよね!?!なのに何故か売れないんですよ、何故なんでしょう!」

「それはなかなか謎だな…この街の冒険者はこれの何が気に入らないのか…!」

「それこの街で誰かがうつかり飲んだら大惨事だよな!」

「じゃあこれはどんな道具なんだ?」

「それはセンプウキと名付けられた、風を起こす新商品です!夏に風で涼むことの出来る優れものなんですよ!使い方も簡単で、その羽根の背ろの部分に魔力を流し込むだけなんです!両手で魔力を流し込まないと動かないんですけどね!」

ウイズがセンプウキの背後に回り込み、魔力を流すと羽根が回って風を起こし始めた。店内にいた俺達を店の外まで吹き飛ばす強力な風だ。

「凄いなこれ!すごい涼しかったぞ、俺が保証する、これは絶対バカ売れ商品になる!」

「ならねえよ、風力強すぎだし、魔力を注いでる本人は一切涼しくねえだろ!?!これホントはモンスター吹き飛ばす用の魔道具なんじゃねえのか!?!」

「分かっていただけですか!!さすがライさん、見る目があります!」

「おうよ、この価値が分かんない奴なんて冒険者に向いてるとは言えねえだろ!」

そう言った俺は、先ほどから店内にいて商品の悪口を言う一人の男を見る。

こいつはダスト、この街で暴れ回るタチの悪いチンピラ冒険者だ。

俺は商品を買うでもない、何しに来たのかわからないダストに向けて。

「この価値が分かんない奴なんてとてもじゃねえが人間じゃねえだろ！」

「もう一度言わんでいいわ、お前らの見る目のなさはよく分かった！ていうかお前今さらっと俺を人外扱いしたろ！人間じゃなきや俺は一体何だっていうんだよ！」

「ダスト」

殴りかかってくるダストを軽くあしらった俺は、外のダストボックスにダストを返してやることにした。

~~~~~

カズマに頼んで、もうひとつ眼魂を覚醒させてもらった俺は、街の近くに発生したファイヤードレイク退治のクエストを受けることにした。

なんでアクセルの街の近くにファイヤードレイクなんて出たのか不思議だが、最近近くに越してきたらしい魔王の幹部とやらが関係しているのかもしれない。

街を出て、ファイヤードレイク達の見撃情報があつた森に向かう。

道中、遠目に何かの大軍が通つたのが見えたが、商隊にしては馬車もなかったような。

…まあいいか。

『開眼!ロビンフッド!ハロー!アロー!森で会おう!』

今回覚醒させた偉人は、ロビンフッド。

弓が得意だったと伝わる、異世界の義賊だという。

そう、弓が得意な俺にはうってつけの偉人だ。

慎重に森を進んでいくと、情報通り数匹のファイヤードレイクがうろうろしていた。

高い木の上に飛び乗っていた俺は、ガンガンセイバーに新たなアイテム、コンドルデ
ンワーを装備し、熱そうなトカゲに狙いを定めてガンガンセイバー アローモードから
光る矢を放った。

いやはや、こんな低レベルのうちからファイヤードレイクを狩れるとは夢にも思っ
ていなかった。

死んだというのはゾツとしないが、結果オーライと言うべきだろう。

そんなことを考えながらアクセルに帰ってきた俺が目にしたのは。

門の前に集まる、大勢の冒険者と。

めぐみんを庇ったダクネスに、死の宣告を与えるデュラハンの姿だった。

「クルセイダーの呪いを解いて欲しくば、俺の城に来るがいい!俺のところに来ること

が出来たら、呪いを解いてやろう！だが、低レベル冒険者ばかりの貴様らにたどり着くことが出来れば、の話だがな？クハハハハハ！」

ダクネスに呪いをかけ、あのDMに少々絡まれていたデュラハンはやがて、勝ち誇ったように笑い声を上げながら俺の隣を通り過ぎていった。

「お前ら！大丈夫か!？」

俺は慌てて駆け寄ったが、暗い顔をしためぐみんが俺の隣を通り過ぎていく。

「おい、どこ行くんだ!？」

カズマが声をかけると、めぐみんは明るい顔で。

「ちよつとあのデュラハンに直接爆裂魔法ぶつけて、ダクネスの呪いを解かせてきます」

マジか。

それを聞いたカズマははあーつとため息をつく。

「俺も行くよ。めぐみん一人じゃ爆裂魔法一発打って終わりだろ？俺がいれば城のアンデッドから隠れながらベルディアのどこまで行けるかもしれない」

あのデュラハンはベルディアと言うらしい。

ならば。

「俺も混ぜてくれよ、お前ら二人よりは戦力になれるんじゃないか？」

俺の申し出に、めぐみんは一瞬嬉しそうにしたが。

「それは嬉しいのですが、これは私達の問題ですし…」

「みずくさいこと言うなよ、この街にやってきたデュラハンの標的がたまたまお前達になっただけだろ? お前らは何一つ悪くないじゃないか。俺は虫けら見たいに人間を殺すデュラハンが許せない」

「どうしましょうカズマ、ライは私達がやらかしたこと知らないみたいですよ」

「黙つとけよ、戦力には違いはないだろ? ここは好意に甘えようぜ」

俺の言葉を聞いた二人は、何かコシヨコシヨ言ったかと思うと。

「じゃあお言葉に甘えることにしましょうかね」

そう言つてめぐみんが俺に笑いかけ…

『セイクリッド・ブレイクスペル!』

それは、ダクネスをペタペタ触っていたアクアがかけた魔法。

「この私にかかれば、デュラハンの魔法なんか簡単に解除できちゃうわよ! どう? 私もたまには役に立つでしょ?」

俺達のやる気を返せよ。

覚醒した眼魂：3個

第四話 壮絶！魔王戦の裏側！

「クエストに行くわよライ！」

俺がクエストに行っている間にデュラハンが街を襲撃してから数日後。

水の女神が威勢良く店のドアを開く。

「クエストに行くのはいいがお前はもう出禁な」

そのドアを俺がそつと閉めた。

「なんでよー！なんで私が出禁にされなきゃならないのよ、私何もしてないじゃない！」
「何が何もしてないだ白々しい！お前が商品にあちこち触るからポーションが水になるし、ドアノブに聖水かけてくからウイズが火傷してるんだよ！やめろ引つ張るな、ドアが壊れる！」

「浄化しちゃうのはしようがないじゃない、私は水の女神なんだから、自分の意思と関係なく浄化しちゃうの！ていうか忌まわしきリッチーに嫌がらせして何がいけないのよ！」

「じゃあ商品をあちこち触らなきゃいい話だろうが！それにリッチーだろうが何だろうがウイズに手を出す奴は許さねえぞ、ウイズは俺の大事な……」

そこまで言っただけでハッとしました。

急にアクアが静かになり、扉を開けると……

俺の言葉を聞いていたらしいカズマ達一行が揃いも揃ってニヤニヤしていた。

「ライったら、そーゆーことだったのね!リッチーの店で働くなんて何か裏があるとは思ってたのよ!」

アクアがニヤニヤしながら言い放つ。

くっそお……

しかしただ一人、どういふことなのか理解出来てない様子のダクネス。

「なあ、そーゆーこととは、どういふことなのだ?」

「分からないのですか?つまり、ライはウイズのことが……」

「おっとめぐみん、それ以上言うならそれ相応の覚悟をすることだな!」

~~~~~

「それで?何故俺をクエストに?」

確かこいつらは、俺の知らないうちに起きていたキャベツ狩りのクエストで大儲けしていたはずだが。



ベルディアが来ている影響で高難度クエストばかりの今、わざわざクエストに行く必要はないんじゃないのか。

「それが、アクアがキャベツだと思って捕まえたもののほとんどがレタスだったらしくてさ。この馬鹿はキャベツ狩りの報酬が相当になると思ってあちこちに借金してたらしく、もう金がないんだとさ」

ええ…

「それで、水を浄化出来る私はこのクエストを受けることにしたんだけど…」

アクアがクエストの紙を見せてきた。

『湖が汚くてブルータルアリゲーターが住み着いて困っています。湖の浄化をお願いします。湖が浄化されるとモンスターはどっか行くので討伐はしなくてもいいです。報酬は三十万エリス』

「…なるほど。これをアクアが浄化するっていうのか。でも、これなら俺いなくていいんじゃないのか？ブルータルアリゲーター倒す必要はないんだし」

「そうなんだけど、湖の浄化をしてると多分ブルータルアリゲーターが邪魔しにくると思うのよ。そしたらそのブルータルアリゲーターを足止めしてくれる人が必要になるんだけど…」

なるほど、めぐみんの爆裂魔法じゃアクアを巻き込みまうし、カズマじゃむしろ殺

されるのがオチか。

「ダクネスは上手く引き付けてくれるんだろうが、今はたまたま実家に帰っているらしい。」

「なんでも、カズマにいい作戦があるとのこと。まあ念の為付いていくくらいなら行ってやってもいいかな。」

「店はウイズに任せ、俺はカズマ達のパーティに付いていくことになった。」

湖に向かう道中。

「ねえ、なんかもつといい方法なかったの? 私、売りに出されるレアモンスターになった気分なんですけど…」

「カズマの作戦により、アクアは檻に入れて運ばれていた。」

「まあまあ。これはモンスターを入れる用の檻だ、攻撃されてもそうそう壊れないから安心出来るだろ?」

「モンスターはライが倒してくれるからいいと思うんですけど…」

「だって俺の攻撃ダクネスに全然効いてなかったし。あれはダクネスが硬すぎたとはいえ、他のモンスターになら効く確証もないだろ?」

「ダクネスにダメージ与えたんだから、十分効くと思うんですけど…」

ちなみに今回のクエストのためにカズマに何人かの偉人について教えて貰ったんだが、まだ眼魂にはしていない。いざとなったら使おうと思う。

湖に到着し、アクアが入った檻を湖につける。

「私、ダシを取られるティーバッグになった気分なんですけど……」

このまま半日待てば浄化は完了するらしい。

俺達は少し離れたところでアクアを見守ることにした。

~~~~~

いけない、うっかり眠ってしまっていた。横を見ると、めぐみやライもウトウトしている。

アクアは数時間ほど浄化し続けていただろうか。相変わらず檻の中で暇そうに体育座りしている。

「おーいアクア、浄化はどうだー？ トイレに行きたくなったら言えよー、引き上げてやるから」

「浄化は順調よー！ 大丈夫よ、アークプリーストはトイレなんか行かないからー！」

お前は一昔前のアイドルかなんかか。

「なんか大丈夫そうですね。ちなみに、紅魔族もトイレには行きませんよ」

「よしいいだろう、今度一日じゃ終わらないクエスト受けて本当にトイレ行かないか試してやるよ」

「紅魔族はトイレなんか行きませんが、謝るのでやめてください。それにしても、何も来ませんね。このまま無事に浄化が終わればいいのですが」

めぐみんがそんな、フラグになるようなことを言ってくる。

きつとそのセリフのせいだろう。

「わあああ、なんか、なんかいつぱい来たんですけどー!助けてー!ライーライー!早く助けてよー!」

アクアが入った檻に、ワニの大軍が襲いかかり始めた!

2時間後。ワニが現れてきてからというものの、アクアは一心不乱に浄化魔法を使い続けていた。

『ピュリフイケーション』! 『ピュリフイケーション』! 『ピュリフイケーション』!

アクアが入ってる檻をガジガジとワニ達が齧り、回し、蹂躪している。

『ピュリフイケーション』! 『ピュリフイケーション』! ギシギシいつてる! 檻が変な

音たててるんですけど!!」

そろそろ助けてやった方がいい気がしてきたが、ライを見るとグツスリ眠っている。

「…なあ、ライってゴーストだから寝れないんじゃないかなかったのか?」

「ウイズがゴーストでも眠れるようになる睡眠薬を仕入れてくれたと言つて、先ほど嬉しそうに服用してましたが」

めぐみんがそんなことを。

「効果があつたようで良かったな、眠れないから脳の情報処理が追い付いてなくて頭痛いってずっと言つてたし」

「ちよつと、呑気なこと言つてないで起こしてよー!というかなんでライもこのタイミングでそれ使つたのよ、普通夜でしよ使うなら!」

少し可哀想だが、アクアのメンタルが持たなそうなので起こしてやることにしよう。

「ライーライー起きてくださいーい」

「ん…あれ?ここどこ?…はっ!」

めぐみんに起こされ、状況を思い出したライが世界偉人録を開き、召喚魔法を唱えた。

「今待つてろアクア!異世界の発明王の力を見せてやる!」

召喚した眼魂をドライバーにセットし、仮面ライダーに変身する。

『開眼!エジソン!エレキ!ヒラメキ!発明王!』

「ちよつちよつとライ、湖でそんなの使ったら…」

「ああ、みんな一撃で倒してくれるわ!」

ライがガンガンセイバーから放った電撃は一体のワニに捉え。

湖全体にその威力を拡散させた。

…もちろんアクアまで巻き込んで。

今回のクエストで散々トラウマを植え付けられたアクアは、檻から出てきてくれなくなつた。

~~~~~

「アクアごめんって!俺が悪かつたからさ!いい加減その檻から出ないか?」

「嫌。ここが私の天国よ、外の世界は危ないわ」

めんどくさいことになった。

いや、寝ぼけてたとはいえ、アクアがいるのに湖に電撃を放つた俺も悪いんだが。

今回ばかりは俺が低レベルだったのが不幸中の幸いというべきだろう。

檻から出ないアクアをそのままに、もう街中まで来てしまつてゐる。

これはそろそろまずい。

アクアをどうにかして檻から出せないかと、考えを巡らせていたその時。「め、女神様!?何をしているのですか、そんな所で!」

アクアを女神と呼び、檻に駆け寄ったその男はその鉄格子を苦もなく曲げてしまった。

アクアに手を伸ばすも、アクアは全く反応する様子がない。

「おい、その檻借り物なんだから勝手に曲げるんじゃないよ」

俺はアクアより檻の心配をすることにした。

「なんだ君達は…アクア様とどういう関係だ?一体何をしていた?」

俺が絡まれた。余計な口出すんじゃないかった。

その隙にカズマがアクアに耳打ちする。

「おいアクア。あれお前の知り合いだろ?女神とか言ってるし。お前が何とかしろよ」

「女神…?…ああっ!!そうよ!私は女神よ!それで、女神の私にこの状況をどうにかして欲しいってわけね!」

自分が女神であることを思い出したようで、途端に元気になるアクア。

アクアは檻から出て、謎の男を一瞥すると…。

「誰?」

どうやら知らないらしい。ていうか初めて俺と会った時と同じような反応だな。ま

た人違いか。

しかし、男の方は意外だったようで。

「い、いや!僕ですよ!御剣響夜ですよ!あなたに魔剣グラムを頂きこの世界に転生した……!」

ミツルギキョウヤと名乗ったその男は持っていた剣を抜き、アクアに見せる。

「あ、あ……。居たわねそんな人も!他にも結構な数を送ったし、忘れててもしょうがないわよね!」

アクアの言葉にミツルギは若干顔を引きつらせたが、すぐに戻し笑顔でアクアに話しかける。

「お久しぶりですアクア様。あなたに選ばれた勇者として、日々頑張ってますよ。ところでアクア様は何故この世界に?というか、何故檻の中に?」

ことの次第を聞いたミツルギは驚いたように声を荒げる。

「女神様を無理やり連れてきて!?!今回のクエストでは檻に入れて湖につけて!?!モンスターと一緒に電撃を浴びせた!?!一体何を考えてるんだ君は!?!」

おっと、俺がやらかしたこともカズマのせいになってますね。



「でも私としては連れてこられたことはもう気にしてないし、毎日楽しくやってるのよ？馬小屋暮らしももう慣れたし！魔王を倒せば帰れるんだし、今日のクエストだって多少の怪我はあつたけど無事終わったわ！しかも、報酬を全部くれるっていうの！30万よ30万！」

アクアがカズマのフォローをするが、ミツルギはまだ納得しない。

「アクア様が馬小屋暮らしだと!？」

ミツルギはカズマの胸ぐらを強く掴んだ。

「…痛いんですけど」

「知り合いか何だか知らないが、うちのパーティメンバーにこれ以上の無礼はこの私が許しませんよ?」

「君は…アークウィザードか」

「ご名答！我が名はめぐみん、紅魔族随一の天才にして、爆裂魔法を操りし者！」

果たして、今のタイミングで自己紹介をする必要はあつたのか。

「めぐ…?あだ名…?」

「私の名前に何か文句があるなら聞こうじゃないか」

ほら、ミツルギが困惑しているじゃないか。

「…ま、まあそれはいいとして。いいアークウィザードも連れてくるんじゃないか、おお

かた冒険者の君達二人が足を引つ張っているんだらう? 情けないとは思わないのか?」

「俺はパーティメンバーじゃない」

「えっ…そ、それなら尚更だ、こんな優秀な二人の足を君一人で引つ張っているんじゃないのか!」

散々言つたミツルギは、アクア達に向き直ると。

「君たち、今まで苦労してきたんだね。これからは僕のパーティーに入るといい。高級な装備品も買ひ揃えてあげるし、もちろん馬小屋でなんて寝泊まりさせない。パーティーの構成的にもバランスがいいじゃないか。ソードマスターの僕に、僕の仲間の戦士と盗賊。アークウイザードの君と、アクア様。ピッタリなパーティーじゃないか」

おっと、カズマがハブられてるな。

しかし、二人は気に食わなかつたようで、二人でコソコソ言っているのが聞き取れる。

やがて、めぐみんなが爆裂魔法を唱えだしたので慌てて止めた。

「えっと、俺の仲間は満場一致であなたのパーティには入りません。それじゃ」

カズマが行こうとするが、なおもミツルギはカズマの前に立ち、道を塞いだ。

「…どいてくれますか?」

「悪いが、アクア様をこんな境遇には置いておけない。どうだ、僕とひとつ勝負をしないか? 僕が勝つたらアクア様を譲ってくれ。君は最弱職だつて言うし、そのもう一人の

冒険者と二人がかりで構わない。君たちが勝ったら何でも一つ、言う事を聞こうじゃないか」

「よっしや乗った！」

「おわっ!？」

ミツルギがそう言うのを予想していたかのように、カズマがダガーで即座に攻撃を仕掛ける。ミツルギはなんとかダガーを魔剣で受け止めるが：

『ステイルル!』

カズマがステイルルで魔剣を奪う。なんという強運。そのまま奪った魔剣をミツルギに振り下ろすが、さすがに避けてきた。

俺も参加していいんだっとな。

話を聞くに、相手は恐らく異邦人。手加減はいらなそうだ。

ガンガンセイバーを召喚し、ハンマーモードにした俺はドライバーとアイコンタクトさせ、地面に叩きつけた。

『ダイカイガン! オメガボンバー!』

「ゴはっ! ガっ!」

衝撃で弾け飛んだミツルギは、カズマがもう一度振りかぶった魔剣を頭に受け、その場で伸びてしまったようだ。

「じゃ、魔剣は貰ってくぞ」

カズマがそう言って魔剣を持って帰ろうとする。お前持ってもそれ使えないのは。

その後、カズマがミツルギの連れに絡まれ始めたので先に帰ることにした。

「ただいまー…つてウイズ!」

魔道具店に帰った俺が見たのは、床に倒れて薄くなっているウイズだった。

一体誰がこんなことを…!

よく見るとウイズの足元にある箱が落ちていた。

箱が僅かに開き、そこから光が漏れている。

…どうやらうちの店主はターンアンデッドの効果を出す魔道具の効果を自らの身を張って立証したらしい。

俺の憧れの人は一体何がしたいんだろうか。

心臓に悪いのでやめてほしい。まあ、そんなうっかりなところも可愛らしいんですけどね。

俺は箱を閉め、薄くなったウイズを寝室に運んでやる。

アクアに攻撃された時より危険な状態ではないだろうし、しばらく休ませておけば回

復するだろう。

俺がそのまま顔色の悪いウイズの寝顔を眺めていると：

『緊急！緊急！冒険者各員は、武装して正門に集まってください！特に、サトウカズマさん御一行は大至急！』

…この前のデユラハンだろうか。

緊急招集だが、ウイズと店をこのまま放っておくわけにもいくまい。

きつとアクアなら対抗出来るだろう。

俺は、このまま残ることにした。

しばらくウイズの寝顔を眺めていたが、下から何か騒がしい物音がするので降りてみることにした。

ウイズにばかり気を取られていたが、残ったからには店を守るのが俺の使命というもの。

店を脅かすような不屈き者は残らずぶつ殺してやる！

だが、店に降りてみるとそれは物静かで、客一人としていなかった。

客が来ないのもどうかとは思うが。

なんだ外か。一体何事だろうか、扉を開けて外を覗いてみると：

「いやああああ!やめて、こっち来ないで!」

「おい、誰か教会行つて聖水もつと貰つてきてくれ!」

外は阿鼻叫喚と化し、街には無数のアンデッドナイトがひしめいていた。

なんだこれ、やべえ!

「どうなつてんだ、変身!」

『開眼!ゴエモン!』

「セイハー!」

ゴエモン魂に変身し、アンデッドナイトを殴り飛ばすが、それで完全に倒すことは出来ない。

どういふことだ、アクアがいるんじゃないのか!

と、そこに。

「いやああああ!なんで私のところにはかり来るの!?カズマ、カズマさあん!」

「いいぞ、もつと惹きつける!」

カズマが、何故かアンデッドナイトにたかられているアクアを連れて通り、アンデッドナイトを回収していつてくれた。

しばらくすると、街の外の方から爆音と閃光が響いてくる。

めぐみんがアンデッドナイトをまとめて吹き飛ばしたのだろう。

もう大丈夫そうだったので、変身を解いて店に戻ることにした。

この騒ぎのうちに、ウィズは結構回復していた。

薄さもほぼ元に戻り、顔色も依然として青白いながらもさつきまでは良くなっている。もう大丈夫そうだ。

店で待っていても人っ子一人来ない様子なので、紅茶を作り優雅に啜り、窓から店の外に目を向ける。

気づけば、なんかデカイ影がこちらに向かって来ていた！

即座に飛び出した外に俺は、そのデカイ影の正体を街の人達の叫び声で知る。

「津波が来たぞー……！」

「早く、出来るだけ丈夫な建物内に逃げるんだ!!」

さっきのアンデッドナイトはまだ理解出来たがなんなんだこれは、こんな街中に津波なんか来てたまるかよ！

パツと見ただけでもかなりの大きさの津波。

これではきつと、あまり丈夫ではない建物など直ぐに破壊されてしまうだろう。

これはまずいことになった、店を守らないと！

ウイズはまだ寝ている、俺がやるしかねえ!

でも、そんなのどうすればいいってんだ!?

ベンケイの力で弾き返す? そんなのもって一瞬だろう。どうする?

エジソンの電撃? そんなの濁流に放つたら放電津波にグレードアップするだけだ。どうする!?

津波はもう既にご近所さんをどんどん流していく、どうする!

何かあるはずだ、考えろ、考えろ考えろ考えろ…

カズマが読んでくれた偉人の情報を思い出せ…!

要は津波を店から遠ざけられれば…あれを弾くことが出来れば…

弾く? 反発…そうだ、カズマが言っていた。異世界の偉人が発見した、俺が今立っているのは引力の力だと…そしてそれに相對する、反発し合う力…! 斥力…これならいける!

「ニュートンさん! 強力なやつ、頼みます!」

咄嗟に世界偉人録を開いた俺は、新たな偉人であるニュートンを召喚し、その綺麗な水色のゴーストパーカーを全身が黒い鎧に覆われたこの身に纏う。

「右手が…押し返す方!」

既に目前に迫っていた大津波に右手を突き出した俺は斥力を操り、力いっぱい津波を



押し戻す。

途端に津波が割れ、店を避けるように後ろへと流れていった。

段々と水流が弱くなつていく。

よっしや、出来た…

魔力、体力共に使い果たした俺は変身を解除され、その場で崩れ落ちるようにしてその意識を手放した…

覚醒した眼魂：5個

中二病でも魔女がしたい!

## 第五話 交換!二つのパーティメンバー!

「どっかに割のいいクエストねえかなあ…」

緊急招集があったあの時、俺は魔力の大量消費によって一時的に意識を失っていた。

変身や必殺技にもそれぞれ魔力は使う。あの時もウイズがドレインタッチというスキルで魔力を分けてくれなければ危ない状態だったらしい。

そうして店はどうにか守りきったものの、緊急招集に応じなかった俺には報酬が出なかった。

あの時、カズマ達のパーティがなんと魔王幹部ベルディアを討伐したらしい。

緊急招集に参加した人達にも報酬が割り振られ、この街の冒険者はほとんどが小金持ち状態だそうだ。

季節は冬。この時期は弱いモンスター達も冬眠に入ってしまった、クエストも手強いモンスターの討伐依頼しか残っていない。

俺以外の冒険者達が皆クエストに出ない今、一人で強いモンスターと戦うのはり

スクが伴う。

いや、もう死んでるからこれ以上死ぬことはないし、仮面ライダーとなつて戦えないこともないが、神器を持つているとて自分自身のステータスが伴わなければぶつ飛ばされて無駄に痛いだけだろう。

ベルディアの討伐の際に大量の水を召喚して街を派手にぶつ壊し、見事に名譽と多額の借金を得ることに成功したカズマ達のパーティに入れてもらつてもいいが、先日雪精討伐の時にカズマが冬將軍に襲われて一度死に、アクアに蘇生させてもらつてしばらく激しい運動が禁止されちゃつてたりするらしい。そんな状態のヤツにクエストに連れて行つてもらうのはちよつと気が引けた。

「なんか都合よく美味しいクエストとか転がり込んでないかなあ……」

そんなことを言いながら客の少ない魔道具店の机に寝そべっていると（店員としてあるまじき行為だ）、少ないお客さんの一人が声をかけてきた。

「じゃあ私達のパーティと一緒にゴ布林討伐とかどうよ？」

彼女はリーン。あんまり物は買つていかないがちよくちよくこのウィズ魔道具店を覗いていつてくれて、たまに安い魔道具とかなら買つていつてくれる数少ないお得意様の一人だ。

「さつき運良くゴ布林討伐のクエストが転がり込んできてね？ 私達はこの前の

魔王幹部戦で私達の懐はあつたかいし、幸せのおすそ分け、みたいなた。

た。  
そこまで言ってもらって断る義理はない。喜んで動向させていただくことにし

「とということ、俺の名はライ。最弱職の冒険者だが、足を引つ張らないようにするのよろしく頼む」

「おう、俺はテイラー。こつちが狙撃手のキースで、コイツがリーンだ」

「知ってる」

「確認までにな。あと一人問題児がいるんだが…」

その時、俺の肩を何者かが掴む。

「なんだお前、あのおっぱい店主にバイトで雇われてる男じゃねえか? アクセルの街の顔とまで呼ばれるこのダスト様に挨拶もなくうちのパーティメンバーと猥談だなんていい根性してるじゃねえか」

「…こいつだ」

ダストにもパーティメンバーがいたのか。

「なんだダストか。猥談なんかしないし次おっぱい店主呼んだらこの前の飲んだ

ら爆発するポーション飲ませるからな」

「あれ使うとアクセルごと壊滅するからやめとけよ……と、とにかく！うちのパーティに入るだつて？どこの骨だか知らねえヤツを簡単にパーティに入れるわけにはいかねえ。表へ出るよ、俺と一戦交えてもし勝てれば認めてやらんこともねえ、ただし負けたら有り金全部置いてつてもらうことになるぜ！」

こうして俺の二度目の一騎打ちが始まった。

結果は。

「この俺を寄せ付けもしないとは、気に入った！今日一日はお前をパーティメンバーとして認めてやるよ！」

襲いかかってきたダストをニュートンの力でぶっ飛ばし、民家の壁に頭をめり込ませてKOしてやった。

調子のいい奴だな。やっぱ苦手だ……

「不思議な力を使うのね……」

「よくわかんないけど、神器なんだとよ」

ついでに興味津々で話しかけてきたリーンとも仲良くなった。

「けつ、神器なんか使いやがって、フェアじゃねえぜ。あーあ、どっかにいいカモいねえかなー」

俺だって死にたくて死んだわけでは…

ふと見ると、ギルドの掲示板でカズマがクエストを探しているのが見えた。アイツ、アクアにしばらく激しい運動禁止されてたんじゃないのか？

「おう、なにしてんだカズマ。激しい運動は控えるようにしとけよ」

「んなこと俺だって分かってるよ。それでも金がないから、楽な荷物持ちの任務でもないかと思ってるな」

なるほど、それなら理にかなってるな。

荷物持ちなら今日のクエストに入れてやりたいくらいだが、他のメンバーもいるし勝手にしない方がいいだろうか。

「あれだけのメンバーが揃っていて荷物持ちの仕事だと？まったくと、もうちよいましな仕事は出来ないのかよ、最弱職さんよお！上級職のいい女を三人も引き連れて、おんぶにだっこで楽してるくせしやがって！おおかた、アンタが足を引っ張ってるんだろ？あーもつたいねえ！俺ならもっと上手くやるってのにな！代わってもらいたいくらいだぜ！」

おっと、油断した隙にまたダストがやらかしてしまったようだ。

「…つてやるよ…」

「あん？」

「大喜びで代わってやるよおお!!」

~~~~~

「俺はカズマ。今日はよろしく!」

と、いうことで、今日一日カズマとダストのパーティをトレードすることになった。

まあこっちのパーティはカズマだけじゃなく俺も今日だけ入れてもらっているから、もう別の臨時パーティのようなもんだが。

リーン、キース、テイラーらのカズマへの自己紹介も終え、冒険へ繰り出すとリーンのテイラーが指揮をとる。

「まあ今日のクエストはゴ布林退治だし、気楽に行こうよ」

「もしカズマが襲われそうになったら、テイラーやライが助けてくれるから、安心してね!」

そう言ってリーンがカズマを励ます。サラッと俺を戦力に数えてくれたことが嬉しい。

でも、カズマも面白い機転を持つてるのは知ってるからな。いろんなスキルを順

調に覚えてるって言うし、むしろ戦力になるんじゃないか。

と、そんなことを考えていると早速。

「ん? 何かが敵感知に引つかかったな。一匹だけのようだが、これゴブリンか?」
なるほど、よく見ると向こうから何かが来るのがポツつと見える。

「一匹か、そりゃゴブリンじゃねえな。用心に越したことはないが、この山道じゃ隠れる場所もないし、迎え撃つか」

「いや、俺なら姿を消せるし浮けるから隠れようと思えばいくらでも」

「それライしか隠れられないじゃん!」

リーンのするどいツツコミを受けてしまった。

すると、カズマが。

「いや、俺が隠密スキルを持つてるからその茂みに隠れても見つからないと思うぞ。隠密スキルは俺に触ってる人全員に効果があるし、戦わないに越したことはないんじゃないか?」

この提案に乗った俺達がカズマに触りながら茂みに隠れると、まもなくそれはやってきた。

まあまあな巨体で四足歩行の、漆黒の魔獣。

恐怖のためだろう、リーンが声をあげかけたので慌てて口を塞いでやる。

それは先程まで俺達がいた地面の臭いを嗅いでいたかと思うと、あたりを見回していたが、茂みに隠れた俺達には気付かずそのまま街の方へと去っていった。

「ぶはっ！こ、怖かったあー！初心者殺しだよ初心者殺し！」

「ゴ布林達がこんな街の近くまで来てたのは初心者殺しに追われたからだったんだな……」

「なあ、初心者殺しってなんだ？」

そうか、カズマは異世界から来たんだもんね。説明してやらないと分からないものもあるか。

俺はカズマに分かるように説明してやる。

「初心者殺しっていうのはな、ゴ布林とかコボルトなんかの弱いモンスターを使って、その討伐に来た新米冒険者を狩る狡猾なモンスターなんだよ。まさに今の俺達がターゲットになるんだろうな」

「まじかよ、恐ろしいやつだな……あいつの爪の垢を煎じてアクアに飲ませてやりたい」

「じゃあ捕まえてくるか」

「だな」

「出来るわけないでしょ……でも参ったなあ、よりによって帰り道の方に行っ

ちやつたよ、これじゃ引き返せない……」

「とりあえずこのままゴブリン討伐を済ませるか。ゴブリンの血の匂いにつられて戻ってくるかもしれないし、そしたらまた茂みに隠れてやり過ぎせよ」

テイラーが的確な指示を出してくれる。実際、まともなパーティと仕事するのは初めてだったから感動する。そうだよな、やっぱこれが普通なんだよな!改めてカズマのパーティは頭がおかしいと思つた。

と、リーンがカズマの持つていた自分の荷物をひつたくる。

「なんかあつた時、カズマも身軽な方がいいからね。その代わり、敵感知と隠密スキル、頼りにしてるよ?」

それを聞いたキースとテイラーもカズマの持つていた荷物をそれぞれ持つ。

「二べ、別に俺達はカズマに頼りきってるわけじゃないからな?」

どうやら二人もカズマに頼りきってるらしい。ちよつと羨ましいぞこの野郎。

くくくくくくくくくくく

どうすれば俺がカズマを差し置いて活躍出来るか考えつつ、しばらく歩いていくと山道はくだりに差し掛かり、ゴブリンの目撃情報があつたあたりまで来た。

ここでまたカズマの敵感知が光る。

「おっいるいる、これがゴブリンだな、たくさんいるぞ。ていうかちよつと多すぎて数えきれないくらいなんだが、こんなにいるもんなのか？」

ゴブリンか…ゴブリンといえば、俺が冒険者になった最初のクエストの討伐対象だったなあ…あいつらのせいで俺はゴーストになったんだったな。

あれっ、なんか腹が立ってきたぞ…

ここまでカズマばかりが目立ってきたが、それなら俺は戦闘で大活躍してやろうじゃねえか！

そう思った俺は、

「そんなにいるのか？それじゃ、ちよつと物陰から様子を見てみた方が良さそうだな…っておい、ライ!？」

何かゴチャゴチャ言っていたキースの言葉が終わる前に飛び出した！

「駆逐してやる…って多！」

そこには、30匹はくだらない、小鬼の集団があった。

それが、飛び出した俺をいつせいに見る。

いや、こっわ！

「だから言ったじゃねえか馬鹿！」

「くそ、もし逃げてもさっきの初心者殺しと鉢合わせちまう!」

「こうなりややくそだ!変身!」

これはまずい。

オレ魂に変身したはいいが、ちよつとこの量は捌ききれない自信がない。

大技なら一気に倒せるが、その分デカイ隙を生む。それもさすがに30匹を一度に倒せるほど攻撃範囲は広くない。そんなもん、めぐみんの爆裂魔法くらいしかないだろう。

そうして考えを巡らせていると、キースの声が聞こえてきた。

「いてえ!矢をくらっちゃまった!弓を持つてるのがいるぞ、みんな気をつけろ!」

まじかよ、くそっどうすりゃいいんだ!

「リーン、支援魔法を!」

「出来上がるまでもうちよいかかるよ!ライ、さっきの魔法ではね返せない!」

魔法?そうか、ニュートンの斥力で!

あれっニュートンどこにしまったっけ!?!これ、はロビンだし…

俺がモタモタしているうちに、またゴブリンの放った矢が飛んできてー

『ウインドブレス!』

カズマの放った初級魔法が、その矢を吹き飛ばした。

「カズマナイス！出来たよ、『ウインドカーテン！』」
リーンの魔法で、風が俺達の周りを取り巻き始める。これで、矢を放たれても食らうことはないだろう。

「すげえ！これが本物の魔法か！よし、俺も！『クリエイトウォーター！』」

「カズマ!?!何を、」

「こうするんだよ！『フリーズ！』」

カズマが、ゴブリンと俺達の間の狭い道に水をぶちまけ、氷結魔法を放つと足場が凍り、ゴブリン達が滑る足場でモタモタし始める。

「すげえ、これならゴブリン達はこっちに來られない！」

「よし、今だ！リーンとキースは遠距離攻撃！この足場でも歩いてくる奴は、俺とカズマで倒す！」

「すげえ、こんな楽な仕事初めてだぜ！」

「よし、強力な魔法ど真ん中に撃ち込むよー！」

俺はもう、完全に蚊帳の外だった。

~~~~~

ゴブリンも討伐し終え、皆のテンションは最高潮に達していた。

「いやあ、ゴブリン退治がこんなに楽になるとは思わなかった!」

「どうりで上級職ばっかのパーティでカズマがリーダーやってるわけだわ!」

「やめろよ、たまたま運が良かっただけだろ。それより、なんで俺があパーティでリーダーやってなきやいけないのか俺にはよく分からないんだが、キースが分かったって言うなら教えて欲しいんだが」

そんな、俺以外すっかり祝勝ムードの中。

「ん?なんだありや?」

「…まずい、さっきの初心者殺しだ!走れ!」

俺達は、もつと注意を払わなければいけない相手を忘れていた。

~~~~~

「はあ、はあ…」

「やばいよ、追い付かれちゃうよ…!」

必死に初心者殺しから逃げてきたが、初心者殺しはどんどん近付いてきている。

やっばそろそろ限界か…覚悟を決めた俺は、足を止めて振り返る。

「…ライ？」

カズマが声をかけてくる。

「お前達は先に行つて、助けを呼んできてくれないか」

「なら俺とキースも残る。カズマとリーンは先に行つて、」

「俺一人で十分だ！出発前にダストをボゴボゴにしたの、見てたよな？まあ今日は全然活躍してないが、そう簡単に負けるわけないだろ、この俺を誰だと思ってるんだ？初心者殺しくらい余裕で勝つて、すぐに合流してやるさ。それに、」

「どうせ一度は死んだ身だ。」

その言葉に、カズマはフツと笑い、また街の方に向き返つて。

「二度は死んだ、じゃなくて今も死んでる、だろ？」

俺はカズマにすべてを託した。

やがて、初心者殺しが腕を組んでいた俺に追いつく。

カズマ達はみんな街に戻り、この場には俺一人。俺は飛びかかってきた初心者殺しの爪をすんでのところで躲し、アイコンをドライバーにセットした。

「変身！」

仮面ライダーゴースト ベンケイ魂に変身し、ハンマーモードのガンガンセイバーを振り下ろす。が、初心者殺しは軽い身のこなしでそれを避けると、ガンガンセイバーに噛み付き、クモランタンを引き剥がしてはじき飛ばした。

そのまま俺の肩に噛み付き、腹に爪を立ててくる。これっ、装甲があつてもなかなか痛いぞ!

その時、背後からさつき聞いたばかりのような声が。

「そうなるから、俊敏な敵にやみくもに大武器を振るもんじゃないんだぞ」

それは、今日一日行動を共にしていたテイラーの声に似ていた。まさか、戻ってきたのか?

いや、噛まれてる肩が痛くて背後を確認出来る状況じゃないんだが。

『クリエイトアース!』からの『ウインドブレス!』

続いて、そんな声がしたかと思うと背後から今度は砂が舞ってきた。それと同じ時、初心者殺しが俺を放し、しきりに目を擦っている。

振り返ると、なんと全員戻ってきていた。

「やっぱ駄目だったじゃん、馬鹿」

「今日一日はお前もパーティメンバーだ、置いてけるわけないだろ」

「すごい効き目だろ?俺の目潰し攻撃」

ちよつと感動して涙すら出てくる。みんな…

すると、カズマが変身解除した俺の肩に手を置き。

「今のうちに！逃げろー！ー！」

初心者殺しが回復する前に、俺達は一斉に逃げ出した。

~~~~~

俺達は息を切らしながら街に帰ってきた。

初心者殺しはとつくに諦めたようだ。思わず感嘆の声が漏れる。

「俺達、初心者殺しに会って生きてるよ…」

お前はもう死んでるだろとか、そういうツツコミは今はやめて欲しい。

今度こそ祝勝ムードの中、ギルドの扉を開けると。

「ひぐつ…カズマアアアアア！」

…

カズマは、そつと扉を閉めた。

「閉めないでくれよ！なあ、聞いてくれよ、酷いんだよ！」

「うん、大体わかった。大体わかったけど、聞きたくない」

「頼むから聞いてくれ!まず、道中コイツらにどんなスキルが使えるのか聞いたんだ。そしたらアークウィザードの子が爆裂魔法が使えるっていうから、そりやすごいって誉めたら「我が力を見せてあげましょう!」とか言い出して、何も無い平地に爆裂魔法ぶっ飛ばしやがったんだ!そしたらよ、初心者殺しだよ初心者殺し!爆発を聞きつけた初心者殺しが走ってきたんだが、肝心のアークウィザードは魔力切れでぶっ倒れてるわ、逃げるぞって言ったのにクルセイダーは突っ込んで行くわ、挙げ句の果てに:」

「おい、初心者殺しの報告はダスト達がしてくれたらしいから、今日は新パーティ結成の宴会といこうぜ!」

「『おー!!』」

「悪かった!悪かったから、謝るから俺を元のパーティに返してくれえええ!」

覚醒した眼魂:5個

## 第六話 電気と雪崩とかき氷

季節はまだまだ冬。相変わらず客のいないウイズ魔道具店で、無気力な俺は机に突っ伏している。

先日のクエスト。テイラー達のパーティにカズマと一緒に混ぜてもらった俺は、ゴブリン討伐でも初心者殺し戦でもまったく役に立つことが出来なかった。

結局俺は駄目駄目じゃないか。思い返せば、ゴーストドライバーを手に入れてからの戦績は、ゴブリン数匹の討伐、アクア退治、ダスト退治、あと…えつと…

それだけだった。ああ、俺は神器で、主に人間をぶっ飛ばしてただけで強くなった気でいたんだな。

「まったく駄目じゃないか…何をやってるんだ俺は…」

ウイズを守るどころか、こんなザマで一緒にクエストを受けたりなんてしたら迷惑をかけること間違いなしだ。

いや、ウイズだけじゃない。このざまじゃ、どこのパーティにも入れやしない。なんとかしなきゃならないのはわかってる。でも、そんなのどうすりゃいいんだ

…

考えに行き詰まった俺は、机の上にあつたドリンクの蓋を開けて中の液体をグ  
イツと

「ああつ駄目ですライさん！それは飲むと嫌な臭いを発してあらゆる生物に嫌わ  
れるモンスター避けで、効果がとても良いので人間にも嫌われてしまうという…  
ちよつ、こつち来ないでください、気持ち悪い！」

~~~~~

翌々日。結局あの日は知り合いにも散々嫌われ、心に大きな傷を負って帰ってき
た。一番のダメージはウイズの「気持ち悪い」だったけど。

ちなみに臭いは二日間取れず、頑張つて身体を洗つてやつと収まった。着ていた
服は仕方なく捨てることになった。

なかなか強力だったなあ。あれは売れる。

しかし、二日間考え通しても俺はこれからどうすればいいのか検討がつかなかっ
た。

いい武器を持っていても、たとえ上級職でも身体や頭の使い方によつては全く役

に立たないことだつてある。それが俺なんだろうなあ。

同時にアクアのこととも思い出した。あれも同じケースか。あれつ、なんか急に深く考えるのが馬鹿らしくなつてきたぞ。すごいですねアクア様。

「す、すみませーん…」

そうだ。この前の初心者殺し戦。あの時テイラーがくれたアドバイス。よく考えたらその通りだ。やみくもにハンマー振り回したら余裕で避けられるに決まつてるじゃないか。ハンマーの使い方は少し考えた方がいいかもな。

「あの一…」

その前のゴブリン討伐は？あの時、俺が飛び出したりしなければもうちよつと作戦も立てられたんだろうな。とっさにニュートンに変身出来ていたらキースが矢を受けることもなかったかもしれない。

「店員さーん…」

俺はとっさに物事を考えられないんだろうな。直していかなければいけないポイントだ。上手く立ち回れるようになればこのゴーストドライバーだつてかなりの効力を発揮するはず。

「あいつ店員さん…！」

「え？」

「さつきから何度も呼んでます！えっと…ライさん…ですよね？」

俺に話しかけてきたのは見た目16歳くらいの女の子。いつの間に目の前にいたんだろう。全く気づかなかった。

「俺がライですけど…」

「はじめまして！わ、我が名はゆんゆん！紅魔族随一の上級魔法の使い手にして、いつか族長になる者…」

この子…ゆんゆんが、紅魔族特有を名乗りと共に自己紹介してくれた。途中から恥ずかしくなったのか、声が小さくなってきたけど。

紅魔族。なるほど、恥ずかしさで紅い目が輝いている。

「今はこの店俺しかいないから、恥ずかしがらないでもいいぞ」

俺がそう言うのと、ゆんゆんが顔を赤らめる。言わないであげたほうが良かったらしい。なるほど、こういう咄嗟の判断力が戦闘にも必要なんだろうな。

こういう時はどうするべきか…ならば、俺も。

「我が名はライ！アクセル随一の死に損ないにして、数多の英雄を使役せし者！」
まだそんなに眼魂は集まってないけど。他に思いつかなかったらしいだろう。

…あ。使役っていう言葉のチョイスは良くなかったらしい。ポケットの中の英雄眼魂が心無しかガチャガチャいってる。眼魂が動くわけなんてないから気のせいだ

ろうが、俺の潜在意識下で英雄の怒りが伝わってきてるのかもしれない。

「え……」

ゆんゆんを見ると、驚いたような顔をしている。お気に召さなかったか？

「笑わないんですか？ 私の名乗りを聞いて？ 私の名前を聞いて……」

「笑わないよ。だって、それが紅魔族の特徴だろ？」

「そうですか……この街の人達は優しいんですね」

ゆんゆんが、そう言って笑みを浮かべる。俺にはウイズがいるのに、ちよつとドキツとしてしまう。

落ち着け、俺にはウイズがいるだろ、思い出せ……

一度落ち着いたので、そろそろ本題に入ってもらおうことにしよう。

「あ、そうだ。それで、俺に何か御用でも？」

「え!? あつ、えつと、ご要件っていうのは……えつと……」

なかなか要件を伝えてくれないゆんゆん。どうしたんだらうか。

「私だけのためじゃないんだから……頑張れ、頑張れ私……」

「えつと、大丈夫？」

「え!? あつはい、えつと、その……わ、私と！ クエストに行っていただけじゃないですよか！」

「クエスト？」

~~~~~

こうして俺は、ゆんゆんと臨時パーティーを組んでクエストをこなすことになった。

今回のターゲットはカキゴリー。雪山において雪崩を起こし、巻き込まれた人やモンスターを掘り出して捕食するらしい。大きな雪玉にデカイ口と角が生えたような容姿をしていて手足はなく、常時浮遊していて、猛スピードで突進してくるといふなかなか恐ろしいやつだ。

え？ポケモン？なんだそりゃ？

「ほんとに寒いですね…はうっ」

もちろん今、俺達は雪山を歩いていた。マジ寒い。

だが、俺はともかくゆんゆんは何も厚着をしてきてないのだ。ゆんゆんの方が断然寒いだろう。

「なんであつたかい格好してこなかったんだよ…ほら、これ着るか？」

「え？いや、いいですよ！雪山の寒さを甘く見ていたのは私なのでっ」



「いいから着ろつて！俺としても女の子を寒いままにさせとくのはあんまり気が乗らないんだよ」

「ひやつ！ありがとうございます、やつぱり優しいんですね」

俺が無理矢理着せると、そう言つて寒さで真っ赤になつた笑顔を向けてくれた。

「いいつてことよ。それより、カキゴリーの目撃情報があつたのこの辺なんじゃないか？」

「え？…いや、どこ見ても真っ白なので位置とか全くわからないんですけど…」

え？いや、それもそうだ。一面の銀世界。むしろ何故俺はこの辺だと思つたんだろう？これが第六感とかいうやつだろうか。

その時、ゆんゆんの足元の雪がわずかに揺れた気がした。

「ゆんゆんゆん！」

「えっ」

咄嗟にゆんゆんに飛びつき、その場から離れさせる。

すると、ゆんゆんのいた所の雪がはじけ、人の半身はある巨大な雪玉が勢いよく飛び出した。

よく見ると角らしきものがあり、目と口もある。なるほど、これがカキゴリーだな。

「あの、ゆんゆんです…」

カキゴリーに注意を向けていると、体の下からそんな声がしてくる。

おっと、ゆんゆんを助けるために押し倒したままだった。ゆんゆんの柔らかい特定部位が俺の下腹部に当たって…

「これは失敬」

もう少しそのままでもいたかったが、ゆんゆんの上から退く。

いや、思わず変に呼んだ名前を訂正されただけだから、退く必要はなかったのか。しまったな…

「ギャガアアアア！」

つと、今はそんな場合じゃねえな。

飛び出してきた一体をはじめとして、数体のカキゴリーが次々と飛び出してくる。全部で四体いるようだ。

「ゆんゆんは下がって魔法の用意を！」

「はい！」

言われた通り、下がって詠唱を始めるゆんゆん。

「変身！」

『レッツゴー！覚悟！ゴゴゴ・ゴースト！』

仮面ライダーゴースト オレ魂に変身した俺は、ガンガンセイバーを持って前衛としてカキゴリーに斬り込む。

前衛にも後衛にもなれるのが仮面ライダーのいいところだ。

「ヴッ！」

剣で一体のカキゴリーを倒すが、別の一体がわき腹にタツクルしてきた。重い一撃に飛ばされ、自分の身体が雪原で跳ねる。

視線を向けると、二体のカキゴリーが突進してくるところだった。くそ、避けられねえ！防御の体制を取ろうとしたその時、カキゴリー達が燃える。

『ファイアーボール！』

ゆんゆんの魔法がヒットしたようだ。すごく助かった。

倒した三体のカキゴリーを確認し、ゆんゆんが駆け寄る。

「大丈夫ですか？怪我とか…」

「問題ないかな。ちよつとお腹が痛いくらい」

「なら良かったです。」

ゆんゆんがホッとした表情を見せてくれる。

「あつあの、今日はありがとうございました！」

「いや、別にいいから！こつちも助かったから！一人でクエスト受けるのは心許

ないし！やめてやめて」

頭を下げてしまったゆんゆんに困惑しながらなんとか取り繕おうとしていると、何か上の方から何か爆ぜるような音がしてきた。

「…え」

最初に確認していたカキゴリーは四体。倒したのは、三体。逃げた一体が引き起こしたんだろう、広域にわたる雪崩が俺達の元に向かってきていた。いや、向かってきていたでは少し語弊があるかもしれない。

雪崩を確認した時、それはもう俺達の目の前まで、今から瞬間移動しようとしたところで到底間に合わないであろう、まさに目と鼻の先まで迫ってきていた。

「ゆんゆんー」

俺はせめてこの子だけでも守ろうと、また咄嗟にゆんゆんに抱きつく。でも、そんなのなんの足しにもならないだろう。どのみち、すべて雪に埋もれて潰れてしまうのだから。

俺はゆんゆんを抱きしめたまま目を閉じた。雪に押し潰される直前、ポケットの中がまた動いた気がした。

だが、いつまでたっても雪が上にのしかかってくる感覚はなかった。もう感覚が雪にやられてしまったんだらうか？それとも、もうとつくに死んで……俺はもう既に死んでいたことに気付いた。

そつと目を開けてみる。ゆんゆんが見える。見える？

何故だろう、すごく明るい。

「ライさん、すごい……！」

「え？」

ゆんゆんの感嘆の声を聞き、あたりを見回してみる。

何か黄色いバリアのようなもの。それが俺達の周囲に半球状に張ってあって、雪を防いでくれていた。

何かの魔道具だらうか？

俺はバリアの出ているところを辿っていき……それは、いつの間にか俺が持っていたガンガンセイバーの先から出ていた。

「ッ!？」

いつの間に変身していたんだらうか、ゴーストドライバーにはエジソンの眼魂がセツトされていて、俺が電撃のバリアを出している！

「なるほど……と、とりあえずこれで雪に潰されて死ぬことはなくなったな。で、こ

「こからどうするかだ……」

とりあえずゆんゆんの前で平静を保つことには成功したが、これがなかなか難しい問題だ。

なんで俺が無意識に変身して、こんな攻撃を出せたかは定かではないが、このままじゃ脱出は出来ない。

ゆんゆんの魔法で雪を溶かしてもらってもいいが、バリアを解かないとこつちの攻撃も外側には届かないだろう。

かといって、バリアを解くともれなく雪に押し潰されて終わりだろうな。

バリアを解いてすぐゆんゆんに魔法で雪を吹き飛ばしてもらうか……ダメだ、上にとれくらい雪があるかわからない。ゆんゆんが魔力を使い切つて、そこでまたカキゴリに襲われたらどうする？リスクが、高い。

ウイズや他の冒険者に助けてもらう？いや、まずどうやってここから連絡を取ればいいのか……

……うん、まずいな。

これっバリアの維持結構キツイ！

~~~~~

何時間経つただろうか。

「くっ…」

「ライさんもういいです、やめてくださいー！」

ゆんゆんがそんな声をかけてくる。魔力の限界が近い。

「やめられるわけ…ねえだろー！」

もう少し耐えれば、通りがかった冒険者が見つけてくれるかもしれない。めぐみんが爆裂魔法を撃ちに来て、全部溶かしてくれるかもしれない。

「やっぱり私が魔法で溶かしますからー！バリアを解いてくださいー！」

「もう少し…まだいけるから…」

さすがに少し意識が遠くなってきた、その時。

『『ファイアボール！』』

バリアの上が開け、光が射し込んでくる。

「大丈夫ですか、ゆんゆんさん、ライさん！」

もうすっかり聞き慣れた、憧れの人の声がする。

「来てくれたんですね、ウイズさん！」

ゆんゆんのその言葉を最後に、俺の聴覚は、視覚は、意識はすべてシャットアウト

トしたー

~~~~~

目を覚ますと、俺は自分の部屋にいた。

「あつ起きましたかライさん！」

「大丈夫ですか!?!どこか痛んだりは!?!」

「なんともないよ、大丈夫」

俺が起き上がると、ゆんゆんとウイズが寄ってきてくれる。どうやら、様子を見てくれたらしい。

「よかった…」

「でも、この子が来た時はびっくりしましたよ」

ウイズの視線の先には得意気に踊るクモランタン。雪崩に巻き込まれた時に咄嗟に俺の元から離れ、ウイズに知らせに行ってくれたのだという。

「そうだったのか…ありがとな、ウイズ」

「別にいいんですよ、それくらいのこと。それよりも！」

ペチンツッ！ウイズの中指が、俺のおでこを叩く。そう、デコピンだ。ウイズにデ



コピンされた。ちよつと頬を膨らまして言う。

「パーティを組むなら、もうちよつとメンバーを信頼すること！ゆんゆんゆんさんだつて、周辺の雪退かすくらい余裕で出来たつて言つてましたよ！紅魔族の魔力を舐めちや駄目です！」

「ゆんゆんです」

「そつか…ごめんなゆんゆん、俺がそんなに魔力量ないからつて俺基準でどうしても考えちまつて。でも、それなら言つてくれれば」

「せつかくライさんが頑張つてくれたので、水を差したくなくて…」

ゆんゆんは赤い眼を光らせて申し訳なさそうにしている。

いや、おい！まあ、紅魔族を甘く見てた俺も悪いんだけどさ！

「まあ、今回はみんな無事だったつてことでお開きにしましょう！でも、今度からはちやんと考えて動くようにしてくださいね？」

「はい」

「じゃあ私、もうそろそろおいとましますね！はいこれ、クエストの報酬です！では、お邪魔しました」

ゆんゆんが報酬を置いて帰つて行つた。

「…ありがとな」

「え？」

俺の言葉を聞いたウイズが狐につままれたような顔をする。

「ウイズだろ、ゆんゆんに俺をクエストに誘うように言ってくれたの」

「バレてましたか」

そう言ったウイズはいたずらがバレたような、それでいて嬉しそうな表情を浮かべた。それは、俺に初めて見せる表情だったと思う。

「ライさんが悩んでいたようだったので。でも、ライさんはゆんゆんさんを助けることが出来たんですね。ならもう大丈夫ですね」

そう言つてウイズはまた笑う。

「…そうだな」

まだまだ課題は残るが、俺はゆんゆんを助けることが出来た。今は、それで十分だ。俺はそう思うことにした。

「ところで、雪はちよつと圧力がかかるだけでも固まりますから、別に魔力無くなるまでずっとバリア張つてなくてよかつたんですよ？」

えっ。

覚醒した眼魂：5個

## 第七話 対決!桶狭間!

これまでのクエストで、レベルがいくつかが上がった。

当然スキルポイントももらっているの、何か新しいスキルを取りたいんだが…

「おはよー!さあ、今日こそ引導を渡しに来たわよウイズ!」

「ウイズなら八百屋行ったぞ。なあ、スキル取るなら何がいいと思う?」

魔道具店に営業妨害しに来た駄女神に意見を求めてみる。

「どれどれ?初級魔法、分身…なんかいまいち。パツとしないわね。よし、あなたには私のとっておきを教えてあげようじゃないの!」

「えー…」

アクアのとっておきとか悪い予感しかない。

「いいのいいの!遠慮なんかいらないわよ!ま、私の寛大な心に感謝しながら使うことね!よく見てなさい、『花鳥風月!』」

アクアが両手に扇子を開き、そこから噴水のように水を出す。

ぜってえ取らねえ…!

~~~~~

ウイズがいつまでも帰って来ないし、店のポーションを水に変えられてはたまらないのでアクアには帰ってもらった。

「なんなんだろうな……」

近頃、眼魂が勝手に揺れたり動いたりしている気がする。まあ、そんなはずはないのは分かっているんだが。それでも、気のせいで片付けられるものとそうでないものがある。

先日のゆんゆんとのクエストだつてそうだ。俺が意識して触ったわけではないのに、いつの間にかエジソン魂に変身して、バリアまで張っていた。

まあ、俺の無意識下での防衛本能が働いたと思えなくもないが、それにしちゃ出来すぎじゃないか？…よし。

俺は、エジソンの眼魂を机の上に置き。

「エジソンのバーカー！阿呆！マヌケ！おたんこなs……」

俺が言い終わらないうちにエジソン眼魂が光りだし、気がつけば俺は見たことも無い空間にいた。

なんだここ？家の中のようだが、見覚えはない。

『ソレツ!』

「ギヤアアアアアアア!」

突然電撃を浴びせられ、目の前が真っ黒になった。

「いって…」

ようやくブラックアウトしていた視界が戻ってくると、目の前には『なにか』がいた。

生きてる人間じゃない。と思う。でも人型で、真っ黒な身体をしていて、目が黄色く光っている。そいつは、エジソンと同じパーカーをかぶっていた。なんだろう、嫌な予感しかない。

「えつと…」

『無礼なヤツだ!コノマエはせっかく助けてやったというのに、このワタシをdisるとはいい度胸してるではナイカ!』

「この前は…ってことは、あんたはまさか!」

『YES!ワタシこそがエジソンだ!』

まじですか。

まあ、元々人間だった魂が入ってるんだ。自分で動いても不思議ではないだろう。ていうか、そこまで予想してたからこそ言ったんだし。

『とういかユー、ちよつと語彙力なきすぎやシナイカ!? ユーに使われるのが急に不安になってきたのダガ!?!』

「あー、本気で罵倒したくて言つてたわけじゃないんで。それより、ここはどこです?」

『ココか? ココはな、眼魂の中だ』

『…は?』

『本気ですか、とでも言いたそうな顔ダナ。本気ダ。眼魂に物理法則が通用すると思うんじゃないぞ』

物理法則が何かはわからないが、本気なことはわかった。

『眼魂はネ、ユーが思つてるよりもはるかにいろんなことが出来るぞ。眼魂のまま動くとか、実体化とか憑依とか』

「なるほど」

便利だな、眼魂。下手したら生前より動きやすい。

『ソレで、ユーを呼び出した理由ナノダガ…ある眼魂のことで問題ガ』

ある眼魂?

『ユーは眼魂を作る時、世界偉人録を使つておるダロウ? ユーが近頃目を離していたスキに、ある英傑が勝手に眼魂化し、現世に出てしまつてイルノダ』

「そんなことあるのか!？」

『アルノダ』

一度世界偉人録が英雄眼魂を召喚する媒介になれば、そこに擬似的に宿っていた偉人が勝手に飛び出すことも不可能ではない、という。その分、自力で出るにはかなり頑張る必要があるらしい。

本来なら持ち主である俺がしつかり管理していればそんなことにはならないんだが、俺は最近落ち込んでいたせいで本の管理なんか気が回らなかった。

「それで、誰が？」

『ノブナガだ』

織田信長。かつて、カズマがいた日本を統一しようとした戦国武将とやらの一人で、なかなかの残虐性も持ち合わせていたという。

『ワタシは止めようとしたのだが…アイツ強いから…』

負けたんだな。まあ仕方ない、エジソンは発明王。本来なら、戦闘することなどなかったのだろう。

『オソラク、アイツは天下人となることをまだ諦めてはイナイ。ライよ、一刻も早くアイツを止めるノダ』

そして、俺は元の店に戻される。

「行くぞ、エジソン」

~~~~~

数刻前。商店街のど真ん中。

「コイツ、つええ……」

全身黒く、紫のパーカーを見に纏った男が尻もちをついた冒険者に刀を向ける。

『まだやるのか?』

「ひいっ……!」

慌てて逃げ去る冒険者。男はフードの奥の目を紫に光らせ、野次馬達に宣言した。

『異世界の住民よ、とく聞け! 儂の名は織田信長! この街を拠点とし、儂はこの世界で天下人となる!』

「ちよつと待ったあ! てめえ、誰に許可取って天下なんぞ取ろうとしてんだあ!?!  
そういうことはまずこの街を支配しているこの俺、ダスト様に許可を取ってからゴハッ  
!」

野次馬の中から飛び出てきたダストが、言い終わらないうちにノブナガの刀に斬

られ倒れ伏す。ノブナガは刀をしまい、目の前で人が死んだ恐怖から一斉に距離を取った野次馬を見渡した。

『他に、儂に挑むものはあるか?』

「待て」

人々の後ろから声がある。人混みをかきわけ、ノブナガの前に出たのはダクネスだった。後ろには、カズマ達の姿もある。

「確かにダストは邪魔なやつだが、やりすぎではないか?さすがに人殺しは看過できんぞ」

珍しく真面目なトーンでノブナガに接するダクネス。

『儂に意見するか。ならば、死あるのみ』

ノブナガは一切無駄のない動きでダクネスを断ち、刀を収めながら倒れるダクネスに視線を向け…

斬られたはずのダクネスはピンピンしていた。

『なにっ!?!』

確かに手応えはあつたはず。しかし、同時にノブナガは思う。手応えはあつた。あつたが…生身の人間を斬った感覚ではなかった。硬い岩の表面を削ったような、そんな感覚がノブナガを襲っていた。運悪く硬い物に刀が当たったのだろう。ノブナガは

そう考えることにした。

『悪運の強いヤツめ。次こそは斬る！』

「あつ……んああつ！」

今度こそ、ノブナガの刀がダクネスを幾度となく捉える。しかし、斬れども斬れどもダクネスは断ち切れない。それどころか、色気のある声を漏らす始末だった。

『ありえん……この娘は何者だと言うのか……！』

しかしダクネスがそんな呟きに答えることは無く、気持ちの良さそうに身をよじる。

「私の服だけを徐々に斬り裂いていくとは……この私の痴態を公衆の面前に晒そうというのか！」

『は？』

目の前の娘は一体何を言い出すのか。

「それでも！たとえどんな辱めを受けようと、私は決して屈つしはしない！さあ  
ん！ん！」

そんなかつこよさげな台詞を吐いてはいるが、ところどころはだけた姿で顔を赤く蒸気させながら、むしろ身体を斬られたかのように手を大きく開いているのかつこよくはない。

と、ダクネスの後ろでダストの死体をぺたぺた触るアクアが困惑するノブナガの目に入った。

アクアは死体の様子を見ると、

『リザレクシオン!』

アクアの蘇生魔法を受けたダストが意識を取り戻していた。

そう、ノブナガが殺した者をアクアが勝手に生き返らせたのだ。ノブナガにとって、十分不愉快であることは言うまでもなく。

『貴様、何をした!』

「何って、死んじやったチンピラを生き返らせただけなんですけど…えっちよつと、何するの!?!」

『問答無用!』

アクアに近づいたノブナガが、その刀を振り下ろす。

しかし、その刀は途中でダクネスに阻まれた。

「んっ…私の仲間にまで剣を向けるのは、この私を楽しませてからにするのだな!」

刀を受けた時に喘ぎ声さえ出さなければ、もう少し決まるだろうに。

「どなたかは知りませんが、私の仲間に手をあげてただで済むとは思わないこと

ですわね」

そしてアクアが狙われたことで激昂しためぐみんが、杖を向け、目を赤々とさせ、ノブナガを威嚇する。

カズマにおぶられながら。

「…お前さつき爆裂魔法撃つたからもう今日は何も出来ないよな」

「余計なことを言うんじゃないです！」

『何だこやつらは…』

余計な口出しをしてめぐみんにポカポカ叩かれるカズマを見て、ノブナガは激しい脱力感に襲われる。

更に、切り捨てたくともダクネスがその都度邪魔をしてくるので斬れない。

『このっ！どけ、貴様！』

「待てっ辱めを受けるのは私だけで十分なはずだ！どうしても言うなら、私を連れて行ってもいい！そして仲間のために捕らわれた私はありとあらゆる拷問を受けて落ちそうになりつつも、いつかカズマ達が助けに来てくれるのを信じ、『この身体を好きにできて、心まで好きにできるとは思うなよ！』と言いながら地獄のような責め苦に耐え続ける…！貴様、なんと卑劣な！」

『僕は何も言っではおらんわ！』

戦国時代を生き抜いた武将ノブナガをも困らせる程のダクネスの恐ろしい性癖である。

ふと、アクアが気付いた。

「あれ、あなたはまだ眼魂化してないのね?ライだったら最近沈んでたみたいだし、世界偉人録を媒介に勝手に出てきちゃったのかしら。あのね、私がライとか偉人達をこの世界にこさせて何も言わないでいるのは眼魂っていう、魂を入れとく器がちゃんとするからなの。ってことで眼魂化してないあなたはこの水の女神アクア様が直々に天界に戻しちゃうのです!さあ、覚悟はいいかしら!」

「ちよつと待ったあー!」

魔法を唱えようとしたアクアを止めるように、ようやくライが到着した。

「やっと来たのねライ。あとちよつとで強制的に昇天させちゃうとこだったわよ」

「悪い。ちよつとこれを作るのに時間がかかってな」

そう言ってライが取り出した、白い眼魂のようなもの。偉人の魂が中に入る前の、ブランク眼魂だ。通常、ライが世界偉人録から英雄眼魂を生成させる場合はゴーストドライバーを通じて自然に眼魂が生成されるが、ライを通さず勝手に出来た偉人はブランク眼魂を作り、その中に偉人を入れる必要があった。

「つてことで、戻れ！ノブナガ！」

ライがブランク眼魂を持った手をノブナガに突き出す。捕獲した偉人ではないのでもちろん戻るはずがない。

「なあアクア、これどうやって入れるの？ブランク眼魂投げて当たったら入る？」

「やってみる価値はあるわね」

「あるわけねえだろ！」

めぐみんを背負ったままツツコむカズマ。ライがボケに走ったことで、彼の仕事が増えたと増えてしまった。

「冗談よ。こういう時は…どうするんだっけ。ねえ、説明書持ってない？あれに書いてあると思うの」

無論、ライが持っているはずはない。説明書は、この世界にゴーストドライバーを持ってきた転生者がとくに捨てていた。

「うーむ、こういう時は…勝負だ、ノブナガ！」

ライが導き出した答えは、プライドの高いノブナガに勝ち、自分からブランク眼魂に入ってもらおうこと。

これなら無理に眼魂化してから協力してくれない、といった自体も避けられるだ

ろう。この状況での最適解と言える。

『いいだろう。ならば、』

直接対決は聞き入れられたようだ。ノブナガが行動を起こす前に、ライは眼魂を押しした。

『いざ参る!』

「変身!」『え、ワタシ!? ミー!?』「あんただよ!」

『開眼! エジソン! エレキ・ヒラメキ・発明王!』

距離を詰めてきたノブナガの刀が届く前にエジソンのパーカーを纏ったライ、仮面ライダーゴースト エジソン魂はとっさにエレキバリアを張り、身を守る。

『貴様、この前の電気の一!』

「大正解だ!」

ノブナガの刀がエレキバリアを離れると同時に、バリアを解除したゴーストはガンガンセイバー 銃モードの先から電撃を放った。

電撃を避けるために距離をとるノブナガ。しかし、電撃はそこまで遠くには届かず、3 m くらいが限界なようだ。

「その距離からじゃ刀は使えねえだろ」

『確かに刀は届かん。ならば、これはどうだ?』



刀は無意味と取ったノブナガが持ち替えた細長い筒状のもの。そう、この世界には本来ないはずの火縄銃だった。

「ライ、銃よ！銃撃が来るわ！」

アクアがライにその旨を伝えるが、それより前にノブナガはその銃口をゴーストに向け、引き金を引いていた。

しかし、ガンガンセイバーの銃モードを知っていたゴーストはいち早くエレキバリアを張り、弾丸を防ぐ。

「へえ、銃っていいのか」

ノブナガが使用するのは火縄銃、これは一度撃つと次弾までに時間がかかる代物だ。一度撃たれた今、チャンスであることは言うまでもないだろう。

「今のうちよ、ライ！」

「よっしやきた！」

アクアの合図でバリアを解いて一気に畳み掛けるゴースト。しかしノブナガはそう簡単には落とせない。

『甘いわ』

次の瞬間、鉛玉がゴーストの左肩に命中した。

「いつてえ！嘘だろ!？」

無論、死んでいるので流血などはない。それでも痛いものは痛い。

依然としてノブナガの銃撃は絶え間なく続いていた。再びエレキバリアで銃弾を防ぎ、バリア越しに見るとノブナガの周囲に二つの火縄銃が浮遊している。ノブナガの持っている火縄銃を合わせると、全部で三つ。

英雄眼魂にはそれぞれ特有の能力がある。エジソンなら電流を使った戦闘、ニュートンなら引力・斥力を操る。

1575年、長篠の戦いで織田信長が行った戦闘方法。連発出来ない火縄銃の欠点を補った、三段銃戦法。察しのいい方々ならもうお分かりだろう。ノブナガの能力は、武器の複製である。

『言ったじゃん!だからワタシ言ったじゃん!相性悪いって!』

『なんだ?もう終わりか?拍子抜けなことよ!』

『うるせー!今考えてんだよ!』

依然として襲いくる銃弾を防ぎつつ、ゴーストは思考を巡らせる。

ベンケイは近寄れないといけないし、俊敏な敵には当たりづらい。弾の速度が速いから、ニュートンじゃ跳ね返すには至らないだろう。ゴーストが考えていると、アクアから助け舟が出される。

「ライ、この私のありがたいお告げを聞きなさい!ロビンよ!ロビンを使うの!

冒険者カードに分身スキルが出てきてたでしょ、あれはロビンの固有能力なの！」

ノブナガが武器の複製なら、ロビンは分身である。たしかに銃は一度にひとつの標的しか狙えないから、効果的なことは間違いないだろう。

しかしゴーストはノブナガから目を離せない。少しでも意識を外せばノブナガは行動を起こすだろう。今の状況でそれは命取りになる。

「冒険者カードをこっちに投げてください！」

めぐみんに言われるがままにライは冒険者カードを投げる。冒険者カードは他人でも操作可能なのだ。めぐみんの代わりにアクアがカードを受け取り、素早く操作し  
て言う。

「習得させたわ！ やっちゃってライ！」

『開眼！ ロビン！ ハローアロー！ 森で会おう！』

アクアの言葉を合図に、銃撃を交わしながら緑のパーカーを纏ったロビン魂は  
ゴーストチェンジ。

直ぐにコンドルデンワールが飛来し、ガンガンセイバーと融合し、弓モードとなる。

「覚悟しな」

ゴーストは得意気に、ノブナガに弓の先端を向けると――

先端から、噴水のように水が噴き出した。

「……は？」

一同騒然。すると、アクアが申し訳なきように手を挙げる。

「さつきちよつとだけ手が滑って、花鳥風月も習得しちやつたの!ごめんなさいねライ!」

確か冒険者が花鳥風月を習得するには、スキルポイントを5つ消費する必要があるが、あつたはずだ。

「お前……これ終わったら覚えてろよ……!」

スキルポイントの浪費を知ったライ……ゴーストは、これまでにない怒りを見せた。

「さつきと終わらせて……っ!アクアに制裁だ……!」

弓モードのガンガンセイバーをドライバーにアイコンタクトさせたゴーストは、弓の先端にエネルギーを集めつつ3人に分身する。

『全て倒せばいいだけのこと!』

銃撃が放たれる。分身がひとつ消える。

『大開眼!』

また銃撃が当たる。分身がひとつ消える。

『オメガー』

ノブナガの手から、三発目が飛ぶ。最後の一体が…消えた。

『全て分身だというのか!?!本体は…!?!』

「……だよ」

次の瞬間、ノブナガの背後にゴーストが現れる。ノブナガが振り返る間もなく、その矢は放たれた。

『ゴーストライク!』

『やはり儂の世はあの時終わっていたようだな…』

そう寂しげに呟き、ノブナガは射抜かれる。

「そーいやまだ名乗ってなかったな。俺は仮面ライダー。仮面ライダーゴーストだ。」

この出来事がきっかけで、仮面ライダーという存在は各地でちよつとした噂になつたりする。

~~~~~

「どこへ行くんだ?」

ライに敗れ、自ら天に還ろうとしていたノブナガに、変身を解除したライが声をかける。

「俺が勝ったんだ、多少は耳を貸してもらおうぞ。どうしても嫌ってんなら仕方ないけど」

『…こんな儂に何を望む?』

「俺と一緒に来てくれ。お前の力が必要だ」

『一度家臣に裏切られた儂に、もう一度他人を信頼しろと?』

ライは少しの間黙り込んだ後、再び口を開いた。

「別に信頼してくれなくてもいい。でも俺はノブナガを信頼するし、もし信頼してくれるなら絶対裏切らない。約束する」

『…よかろう』

ノブナガがライが出したブランク眼魂に入る。白いブランク眼魂が光り、ノブナガゴースト眼魂となった。

「ノブナガ、ゲットだぜ!」

…その後、火縄銃の構造を知りたいとかでノブナガは街の鍛冶屋に連れていかれた。まあ、すぐ戻ってくることだろう。

「あのね、ライ？今回はちよつとした事故つてゆるかなんとゆるか…」

「問答無用！」

「ごめんなさああい！」

アクアもライによつてしつかりシめられた。

覚醒した眼魂：6個

ライが所持する眼魂：5個

クリスマス特別編 独走!サンタクロース!

もうすつかり冬も本番。

今日も一日仕事を終え、就寝に入ろうとカズマ達は馬小屋で隣り合って寝転んでいた。

「もうそろそろ馬小屋暮らしもどうかしないとなー、このままじゃ本当に凍え死ぬぞ」

「まったくその通りよ、この私を馬小屋で寝かせ続けるなんてどういう神経してんのよカズマさんの甲斐性なし!」

「何言ってるんだ、アクアがベルディア戦で街ぶっ壊して借金背負ってなきや今頃ちゃんとした宿で泊まれてたはずなんだよ!」

「カズマ、そのくらいにしておいてやらないか。パーティというのは苦難を分かち合つてこそだろう?」

「そうですねよ、こんな可愛らしい女の子三人とパーティ組めるだけありがたいと思いませんか?」

「…このパーティ抜けてライとでも組んだらもつと稼げるだろうな…」

「「なっ!?!」」

ギヤアギヤア騒ぎ出す女性陣。いつもと変わらない、平和な夜。

暫くして落ち着くと、カズマが天井を見ながらアクアに呟いた。

「日本じゃそろそろクリスマスだっけか?」

「そうねー、こっちの世界にもサンタさん来てくれたりしないかしら」

「クリスマス?」

「サンタさん?」

そんな話題に、めぐみんとダクネスも興味を持ったようだ。

カズマとアクアが二人に話してやることに。

「俺のいた国にはな、このくらいこの時期になると独り身の人達に絶望を届けていく、サン

タクローズって存在がいたんだよ」

「そうそう。子供たちにはささやかなプレゼントを贈り、代わりに大人たちからは容赦

なくお金を巻き上げていく厄介なモンスターよ」

「サタンクローズ…そんな恐ろしいものが存在したというのですか…!」

「サタン…まあいいか。あ、でもめぐみんならまだプレゼント貰えるかもしれないぞ?」

「それは私が子供だという解釈で間違いないでしょうか?上等です、表へ出なさい」

「やだよ、寒いだろ」

「なにおう!」

「落ち着けめぐみん! あんまり興奮するとなかなか寝れなくなるぞ!」

「みなさん、大変です!」

また暴れだそうとするめぐみんを皆で抑えていると、突然入口の方から声がした。

声のぬしはウイズ。急いで来たようで、青白い顔を更に青くさせて息を切らしている。

「どうしたんだウイズ? こんな遅くに」

「カズマさん、助けて…! ライさんが…乗っ取られ…」

「ライがどうしたというのだ?」

「サ、サタンクロースが現れたんです!」

遡ること数刻前。

ライとウイズは私と閉店したウイズ魔道具店の前を掃除していた。

「もうすっかり冬ですね、雪でも降りそうです」

「ははっ、掃除したそばから雪なんて降られちゃたまんねえな」

そこに、相変わらず寒そうな格好をしていたゆんゆんがやってくる。

「あの、ライさんいらつしやいますか？」

「目の前にいるだろ」

「あつウイズさんしか見えてなかったです」

「やめてくれよ、俺はゆんゆん程影薄くないだろ？」

「影薄くてごめんなさい……」

「ライさん酷い……」

泣き出してしまふゆんゆんを慰めながら、ウイズがライを糾弾する。

「ごめん、悪気があつたわけじゃなくて」

「悪気なしにそんなこと言えるとかもつと酷くないですか？」

八方塞がりとはこのことか。

「いえつ大丈夫ですいつものことなので」

「ほんとごめん」

「それより、どうしたんですか？こんな時間に」

「あつそうそう、これを届けに来たんです。道に落ちてたんですけど」

ウイズに指摘され、ゆんゆんが出したものだ。赤い色をした、見たことの無い眼魂だった。

「もしかしてライさんのじゃないかって」

ライは眼魂を受け取り、それをまじまじと見つめる。

「見たことない眼魂だな……」

その時眼魂が揺れ動き、ひとりでに浮遊したかと思うと、勝手に召喚されたライのゴーストドライバーに入り込んだ。

「え?・ちよー」

『開眼!・サンタクロース!・ジングルベル!・星降る!・聖なる夜!』

調子の良い音声と共に、ライは仮面ライダーに変身する。

赤と白ベースのパーカーで、ところどころモコモコした普段より少し暖かそうな新形態。

顔にはモミの木の意匠が施されていた。

紛うことなきサンタクロース。これで街を歩き回れば、子供たちを喜ばせられることはまず間違いないだろう。

「サンタ……クロース?」

ただ、惜しいことにこの世界にクリスマスの文化などあるはずもなかった。

ライはいえ、サンタ魂に変身してから突然一切の動作をやめてしまい、その場で硬直している。

「……」

「ライさん？どうしたんですか？」

「……」

「ライさー」

『H o o H o o H o o ー！』

「ふえつ!!？」

暫く止まっていたかと思えば突然叫び出したゴーストに、二人はビクツと身体を震わせる。そんな二人に、ゴーストは背負っていた大きな袋から綺麗に梱包された箱を手渡した。

「なんですかこれ？」

「くれるんですか、私たちに？え？開けてみる？」

疑いながらもウイズが箱を開ける。覗いてみると、中には上質なチキンが入っていた。

「これ貰っちゃってほんとにいいんですか！やりました、お肉です！久しぶりの固形物です！ちょうど鶏が食べたいと思っていたんですよ！ありがとうございます、ありがとうございます！」

「あのウイズさん、よかつたら今度何か奢りましょうか……？」

大きなチキンに飛び上がって喜ぶウイズ。それを見て困惑した様子のゆんゆんだつ

たが、それはそれとして自らも期待しながら貰った箱を開けると…

中には特に何も入っていなかったという。

「何よこれ！なんで私には箱だけなの!?何がしたいのあなた!」

ゆんゆんは怒り心頭だ。

ちなみにサンタ魂のプレゼントは箱を開けた本人がその時一番欲しいものが入っているものだが、ゆんゆんの場合それが物ではなく『友達』だったため、あげることが出来なかったことに起因している。

『HOOー!』

しかし、形だけでもプレゼントをあげたゴーストは満足したのか、浮遊して何処かに行こうとしていた。

「いくら私でも許すことと許さないことがあるのよ!逃げるな!」

「ゆんゆんさん、おそらくライさんはさっきの眼魂に身体を乗っ取られています!眼魂をライさんから引き離せば元に戻るはずです!」

ウィズの声に頷きながら、ゆんゆんはゴーストを追いかけて行った。

~~~~~

「と、いうことがあって…」

ウイズがここに来た経緯を話し終わると、珍しく静かに話を聞いていたアクアが口を開いた。

「なるほどねー。大丈夫よウイズ、そんなに慌てることじゃないわ。元々サンタクロースっていうのは、クリスマスに子供たちにプレゼントを配るとてもいい存在なのよ！今晩一通りプレゼントを配り終えたら満足してライを解放してくれるんじゃないかしら？」

「そうですか、それなら安心していいですね」

ウイズはそう聞いていくらかほっとした様子だった。息を切らしていたし、相当心配して急いで来たんだろう。

「あの、そのサンタクロースとやらは無償で子供たちにプレゼントを配っているのか？ 私たちのところには来てくれないだろうか…」

ふと横を見ると、ダクネスが目キラキラさせてそんなことを言っていた。

「なんだ、期待してんのか？ たまには可愛いところもあるじゃないかダクネス」

「まったく、可愛らしいのか子供っぽいのか」

「二人ともやめてあげてよ！ダクネスにだって可愛いところはいっぱいあるんだから！」

「みんなして可愛い可愛いと言うなあ!」

可愛いを連呼され、真っ赤になって藁の上の枕に顔をうずめるダクネス。だが、直後に聞こえてきた控えめな鈴の音がダクネスの意識を引き寄せた。

「この鈴の音は…」

『Hōー!』

夜だからか、控えめにシャンシャン言わせながら窓から入ってきたのは、サンタに憑依されたゴーストだった。

「さてはあなたがサザンクロスですね!今すぐライから離れるのです!これは警告です!従わないというのなら私の爆裂魔法が…なんですかこれ、くれるんですか?」

ライごと爆裂魔法とか言い出したためぐみんにサンタ魂がプレゼントを渡す。続けてダクネス、俺やアクアにまで箱を手渡してきた。

「これってプレゼントよ!やったわ!中身はなにかしら?」

嬉嬉として受け取るアクアを見て、めぐみんが半信半疑で箱を開けた。

「あっ!!!」

「なになに?なに貰ったの?」

めぐみんの叫び声を聞き、皆の注目がめぐみんの箱に。めぐみんが取り出した物は…「やりました!小型魔力清浄機です!魔力回復効果が向上すると言われてるんです!



ずっと欲しかったんですけど、こんな高価なもの貰っちゃっていいんでしょうか…」

「いいのいいの！それがクリスマス、サンタクロースなのよ！じゃあ私は楽しみを最後に取っておくから、みんなも開けてちょうだいな！」

アクアがそう言うと、箱を物珍しそうに見ていたダクネスが箱を開け…

「おおっ！ポーシオンだ！これは服用した者の神経を刺激し、一時的に痛みを倍増させるポーシオンだ!!まさに私にうってつけではないか!!」

「「あ、あ…」」

ダクネスらしき全開のプレゼントに、一同かける言葉が見つからないようだ。唯一ウイズだけは『痛みを倍増させる』ポーシオンをダクネスが欲する理由が分からないように、首をかしげている。

「と、とりあえず次はカズマね！」

勝手に順番を決められるのにはちよつとイラツとくるものがあるが、俺とて開けたくてうずうずしてすることに違いはないので開けることにした。結果は…

「なんだこれ」

箱の中には「スカ」と書かれた紙切れ一枚が入っていた。

「なんで俺だけくれないんだ!?!俺何か悪いことしたか?」

「この一年特に悪いことなんて…悪いことなんて…」

どうしよう、思い当たる節がいくつかあって困る。

「プークスクス!カズマさんったらセクハラばつかしてるからサンタさんに見放されたのね!可愛そう!それじゃあ、私もそろそろ中の高級酒を拝むとしようかしら!」

アクアがそう言っつて箱を開ける。

と、同時に箱が爆発し、アクアが黒焦げになった。

悪い子にサンタは来ないか、なるほど。

さっきの挑発で一発引っぱたいてやろうかと思つてたが、なんか気分が晴れたわ。

「なんでよー!」

アクアの泣き声を聞いたサンタ魂は、満足したとでも言いたげに足早に馬小屋を飛び出した。

「アクア様をコケにした罪は重いわよ!あのサンタ、絶対ライから引きずり出して眼魂からも引きずり出してボコボコにしてやるんだから!」

そう言っつてアクアも立ち上がり、サンタ魂を追いかけていく。

と、入れ替わりにゆんゆんが飛び込んできた。

「この辺でサタンが憑依したライさんが変身した仮面ライダー見ませんでしたか!?!」  
「もうこれわけわかんねえな」

サンタ魂が行った方向を教えると、ゆんゆんは凄いい剣幕で飛んで行った。

~~~~~

『H o o H o o H o o ー!』

「待ちなさい!」

浮遊して夜の街を駆け抜けるサンタ魂と、それを追うアクアとゆんゆん。

『ターンアンデッド!』

アクアの攻撃をサンタ魂は避けることもなく、背中を受ける。しかし眼魂化しているゴーストには勿論効果はなく、何事も無かったかのように走り去っていく。

『ボトムレス・スワンプ!』

突然目の前に出来た沼を意にも介さず、ぴよんと跳んで躲した。

その間にもサンタ魂は子供たちが住む家の窓からプレゼント箱を投げ入れていく。

『ファイアボール!』

サンタ魂が迫り来る火の玉を華麗に避ける。が、その先にはいつの間にかアクアが先行していた。

「(イ)までよサンタもどき!」 『ゴッドブロー!』

しかしアクアの頭上を脅威の跳躍力で飛び越し、プレゼント箱をこぼしながら民家の

壁を蹴って屋根へと登って行った。

「抜かったわねクソサンタ!プレゼントを落としてるわ!三つもプレゼントゲットよ!」

ゆんゆんが止めようとするのを気にもとめず、ホクホク顔なアクア。直後、アクアの持っていた箱が大破した。

「なんでよー!」

その後、子供たちにプレゼントを配り終えて満足したサンタ魂はライから抜けて消えていったという。

~~~~~

「酷くないですか!?!私なにも悪いことした覚えはないのに!!」

サンタの暴走から翌日。プレゼントをなにも貰えなかったゆんゆんはウイズ魔道具店でウイズ相手に愚痴っていた。

普段ならこういうことをする子ではないのだが、よほどショックだったのだろう。

「さあ、どうしてでしょうね…?とところで、何が欲しかったんですか?」

ウイズのその問いに、ゆんゆんはビクリと身体を震わせ。

「と、友達が…欲しくて…」

心底恥ずかしそうに、消え入りそうな声でそう言った。

「そうだったんですか。それなら言ってくれば、私たちでよければいくらでも友達になったのに」

ウイズのその言葉に、期待に満ちた目でゆんゆんが二人を見る。

「え…いいんですか? ご迷惑では…」

「どうして迷惑だなんて思うんですか? 大歓迎ですよ! ね、ライさん?」

「もちろんだよ」

店の奥から出てきたライも、優しい顔をしてそう言った。

「えっと…ふ、不束者ですが、よろしくお願いします!」

「ゆんゆん!? そんなに気張らないでいいんだぞ!」

「そうですよ、いつでも遊びに来てくださいね?」

「どうやらサンタクロースは、ゆんゆんにもちゃんとプレゼントを置いていつてくれたようだ。」

二人の言葉に、ゆんゆんは幸せそうな笑顔を見せた。

そして、サンタクロースが置いていったプレゼントがもうひとつ。

サンタクロースが子供たちのために用意したプレゼント。サンタ魂に無からプレゼントを生成する能力はない。よって、その分の代金はどこかで用意されなければならぬのだった。

膨大な量の借金が待ち受けていることを、魔道具店の二人はまだ知る由もなかった。

## 第八話 精霊・幽霊・2018

「…ウイズ、これはなんだ」

「っ……っ」

サンタの暴走の二日後。店の在庫を確認していた俺は、とある請求書を見つけてしまった。

ウイズが俺から請求書を慌ててひったくって隠すが、時すでに遅し。俺はすっかり見えてしまった。

「ウイズ、何があつたか説明してくれ」

「…」

やがて、ウイズが観念したように請求書を俺の前に置いた。

3000万の数字が書かれた、その請求書を。

ウイズの説明によれば。

先日俺の身体を使って暴走していたサンタ魂のプレゼントには実は原価と同じだけ

の金がかかっていたようで、その分の借金がウイズ魔道具店に付けられていたという。

その額が、3000万。

当たり前だろう、アクセル中の子供たちに欲しいプレゼントをあげたんだ、そのくらの額はいく。

サンタ魂は既に満足して昇天していったから、もうアイツから取り立てることもできない。そう、仕方ない、仕方ないことなのだが、俺が怒っているのはそういうことじゃない…

「…なんで俺に言ってくれなかったんだ？」

何を隠そう、この借金の原因はサンタ魂に憑依された俺にある。それならむしろ俺が返すべき借金だ。なのにウイズはそのことを俺に隠していた。

「ライさんを巻き込みたくなくて…ライさんに言ったら絶対、責任感じさせちゃうと思ってる…」

やっぱりか。ウイズはこういうことをする。これがウイズの優しさだってことは死ぬほど分かっているのだが…

「…信用されてないなあ」

「そっそんなこと！」

ウイズがガタツと椅子を鳴らしながら立ち上がる。どうやら、俺が思っていることを



小さく口に出してしまつたらしい。

俺はウイズの、怒つたような、それでいて今にも泣きそうな顔をしばらく見つめ……やがて、俺から目を逸らして席を立つた。

「何処行くんですか？」

「……クエスト。少しでも借金減らさねえと」

そして俺はギルドに向かった。

~~~~~

「はっ、てやつ、おらあ……ふう、やつと二匹か……皆はどうだ？」

真つ白な雪原で、皆に成果を聞く。

『ぬううう！当たらん！一匹も当たらん！』

『ベンケイドノは適当に振り回すカラ風圧で避けられるノダヨ。私の電撃は風ナド生まないカラ、余裕でアタルヨ。もう八匹仕留めた』

『それにしても白くてフワフワしてて、口に入れたら美味そうだな……』

『ロビンさん、ふざけたこと言つてないで私がせっかく引力で脚止めしてるんですから早く仕留めてくださいよ』

『ぬううう！小さすぎて鉄砲の玉が当たらん！』

そう、皆。先日ノブナガの一件で、眼魂達に自我が存在すること、そしてゴーストパーカーとは別で、任意で実体のあるゴースト体になれることが分かった。なので今回は皆にゴースト体になってもらい、討伐対象である雪精を狩ってもらっているのだが：雪精。小さく、白くてフワフワしたモンスターで、危険はないが一体倒すごとに冬が一日短くなると言われているモンスターだ。報酬はなんと一匹十万円。フワフワして攻撃を当てづらいが故に、六人がかりでやっても一時間で十五匹しか倒せていない。ちなみに、英雄ゴースト達が倒したモンスターも俺の冒険者カードに登録される。経験値が入らないのはちよつと惜しいが、討伐数が記録されるだけかもしれません。

だが、急がないとそろそろ：

『気をつけろライ、何かが来るぞ』

周囲の環境に人（？）一倍敏感なロビンがいち早く空気の変化に気付いた。次いで目の前に漂う、不穏な気配。皆の注目の真ん中に現れた、白く大きな人型のモンスター。

冬將軍の到来だ。

冬將軍。何もしなければ害はないが、雪精を狩る者を退治してくる危険なモンスター。その強さは凄まじく、危険度はそこまで高くないにも関わらず、国から二億の賞

金がかげられるほどだ。

俺が今回ゆんゆんにもカズマ達にも頼らず、偉人達とクエストに出ていたのもコイツが危険すぎると判断したからだだった。

なんでも、めぐみんの爆裂魔法ですら一撃では倒せないと聞く。もちろん今の俺なんかが勝てるはずもない。となれば、やるべき事はひとつ。

俺は迷わず武器を捨て、土下座の体制を取った。

偉人達にも言う。

「お前らも土下座だ！早く土下座をするんだ！」

俺が誤算は、この偉人達のプライドの高さを舐めていたことだった。

『断る。何故この儂が土下座などせねばならない』

『コノ私がそうやすやすと頭下げるトデモ？』

『ロビンさん、頭を！気持ちには分かりますが頭を下げてください、この世界のことを詳しくいのはライさんですよ!?!』

『やめ、やめろニュートン！初対面の奴に頭下げるのがどこにいる！』

ニュートンは物わかりがいいので助かる。

だが、全員が頭を下げてくれないこの状態で冬將軍が許してくれるとは…

恐ろしく斬れそうな抜き身の刀を煌めかせた冬將軍は、まずノブナガにターゲットを

決めたのか、そちらへ向かうと素早く一閃する。

が、霊体であるノブナガはその刃を食らうこともなく、平然とそこに立っていた。

しかし冬將軍には何かが見えたようで、そこに狙いを定めてもう一度居合の構えを：直後、冬將軍がノブナガの中心を捉えるその寸前に俺はそこにあったノブナガ眼魂を回収した。

咄嗟に飛び込んだ俺の核である、オレゴースト眼魂を冬將軍の刀が掠める。まさに間一髪だ。

「危ねえな！危うく眼魂壊されるとこだったじゃねえか！眼魂が壊れたら現世に居られなくなるんだぞ、注意しろよ！」

早々にゴースト達の弱点を見抜かれてしまった俺は、他の眼魂達も回収して逃亡を図る。

しかし霊体である俺と同様に、魔力の塊である冬將軍もなかなか早く、逃げ切れそうになかった。むしろ俺より早いかもしれない。

やるしかないか……！

さきまわりしてきた冬將軍が目の前で刀を振る直前に瞬間移動し、背後に立った俺はノブナガ眼魂を起動する。

『バッチリミロー！バッチリミロー！』

アクア曰く、ノブナガの待機音声が普段と違うのは仕様らしい。
「変身！」

『開眼！ノブナガ！俺の生き様！桶狭間！』

仮面ライダーゴースト ノブナガ魂に変身した俺は、ノブナガを使ったらなんか湧いてきた新武器 ガンガンハンドを空中に量産させ、銃モードで冬將軍に向け、一斉射撃を繰り返すが、やはり冬將軍には効いていないようだった。

「やっぱ無理か！」

冬將軍の鋭い攻撃を躲すのもそろそろ限界に近付いてきた。瞬間移動して逃げられないこともないのだが、テレポートとは違ってあまり遠くへは行けない。

万事休すかと思われた、その時だった。

『ファイアボール！』

その声と共に突然火球が現れ、冬將軍の腹に穴を開けていく。

そして火球が来た方には、息を切らしたウイズがいた。

「ウイズ！どうして、」

「今のうちに逃げますよ！」

ウイズはそう言っただけ俺の手を取ると呪文を唱えた。

『『テレポート！』』

周りの空間がぐにやりと歪み、家の前に辿り着く。

ここまで逃げた今、もう冬將軍が追ってくることはないだろう。

「ライさんの馬鹿！こうなると思っただから借金のこと言いたくなかったんですよ！」

家に入る暇もなく、その場でウイズに叱責される。

通りがかつた人々の視線が集中するが、それすら気にならないようだ。

「ライさんは周りが見えなくなることが多いんですよ！3000万なんて一日で返せるわけじゃないでしょう!?!雪精討伐くらいで！」

「ごめん」

「しかも冬將軍と戦おうとするなんて！無茶ですよ！」

「…レベルいくつくらいになったら倒せるかな？」

「反省なしですか！」

「今すぐじゃなくてもいいんですよ。ゆつくりと、無理のない範囲で返済していきましよう？」

しばらくしてウイズが落ち着いてきたのであらためて借金については謝り、なんとか和解を得ることが出来た。

今回の雪精討伐で得たのが150万。借金の残りは2850万。俺は悟った。やつ

ぱり一度に返すのは無理だ。

情けない話だが、今回ばかりはウイズに甘えさせてもらうことにする。

：あれっ、俺ってウイズの世話になつてばつかじやないか？ 今回どころの騒ぎじやない気が。

うーむ。

カウンターに座つて考え込んでいると、店の扉が開く音がした。振り返つてみると、カズマとアクアが来ている。なんだ、客じやないのか。

「いらつしやいませー」

ウイズが店の奥から出てくる。そのウイズに向かつて、カズマが。

「ようウイズ、来たぞ」

~~~~~

それで、カズマは何しに来たのかと言えば。

「ウイズが以前言つてたろ？ 何かリッチーのスキルを教えてくれるつて。スキルポイントに余裕が出来たからさ。何か教えてくれないか？」

なるほどな。それについては俺も興味があつたところだ。

「はああ!?!」

…アクアは気に食わなかったようだ。

「ちよつと、何考えてんのよカズマ！リッチーのスキル？そんなの覚えるなんてとんでもないわ！いい？リッチーってのはね、薄暗くてジメジメしたところが好きな、言ってみればなめくじの親戚みたいな連中なの」

「ひ、酷いつ！」

アクアの言葉に、ウィズが涙ぐんでいる。

「いや、なめくじの親戚でも従兄弟でもいいけどさ。リッチーのスキルなんて普通は覚えられないだろ？そんなスキルを覚えられたら結構な戦力になるんじゃないかと思っ  
てな」

「頼むからウィズのフォローをやってくれ」

とはいえ、カズマの言うことは理にかなっていると見える。カズマのパーティも偏りがすごいからな。

「むうう…」

アクアもこれ以上は言えないようで、黙って頬を膨らませている。せめてもの抵抗だろうか。

めんどくさいので、店の商品を「触らずに」見てこいと追い払うと、アクアは素直に



店内を物色しだした。

そんなアクアをちよつと気にしながら、ウイズが。

「そう言えば、カズマさん達があのベルディアさんを倒されたそう。あの方は幹部の中でも剣の腕に関しては相当だったはずですが、凄いですねえ」

そう言つてカズマに穏やかな笑みを浮かべ…。

「あのベルディアさんつて、なんかベルディアを知つてたみたいな口ぶりだな。アンデッド同士だから何か繋がりであったのか？」

カズマのそんな疑問に、ウイズは世間話でまするのような気軽さで。

「ああ、言つてませんでしたっけ。私、魔王軍の幹部の一人ですから」

そんな、俺ですら知らなかった情報を。

………

「確保ーっ！」

商品棚の間をウロウロしていたアクアが、ウイズに向かって襲いかかった！

「おい待て、俺も初耳だぞ?!あれか、やつぱ信用ないのか!?!いやそれにしてはさらつと重要なことを…おいアクア、ウイズから離れる話が聞けん！」

~~~~~

ウイズの話によると。

ウイズは魔王に頼まれ、魔王城を守る結界の維持だけを請け負っているらしい。もちろんこれまでに人に危害を加えたことは無く、賞金もかかっていないと。

「つまり、あんたが生きてるだけで人類は魔王城に攻め込めないし、私たちには十分迷惑ってことね。カズマ、退治しときましよう」

アクアの言葉のウイズが泣き出す。

「待って！待ってください！アクア様の力なら、幹部の二、三人ぐらいで維持する結界なら破れるはずですよ！魔王の幹部は元々八人。私を倒したところであと六人も幹部がいたら流石にアクア様でも結界破りは出来ません、魔王城に攻め込むにはどのみちまだまだ幹部を倒さないといけませんし！せめて、アクア様が結界を破れる程度に幹部が減るまで生かしておいてください…！私には、まだやるべきことがあるんです…」

取り押さえられたまま泣き出すウイズに、流石のアクアも微妙な表情を浮かべていた。

そのままカズマにチラチラ視線を送る。カズマが決めるってことらしい。

俺もカズマを見る。目が合った。

「…今すぐ魔王城に攻め込めるわけでもないんだし、わざわざウイズを倒すこともない

んじゃないのか?…ウイズを倒そうとするとライも怖いし。ていうか既に敵意いっばいだし」

おっと、俺としたことがそんなに敵意剥き出しだったか。

その言葉に、ウイズがぱあつと表情を明るくさせた。可愛…なんでもない。

「でもいいのか?幹部つて連中は一応ウイズの知り合いなんだろう?ベルディアを倒した俺たちに恨みとかは…」

カズマの疑問にウイズがちよつとだけ悩み。

「…ベルディアさんとは特に仲が良かったわけじゃないですからね…私が歩いてると、よく足元に自分の首を転がしてきて、スカートを覗こうとする人でした」

…おい。

ウイズが続ける。

「幹部の中で私と仲の良かった方は一人しかいませんし、その方は…まあ簡単に死ぬような方でもないですから。それに」

そう言った後、ウイズは。

「私は今でも、心だけは人間のつもりですしね」

と、ちよつとだけ寂しげに笑った。

「ドレインタッチなんてどうでしょう?」

ウイズがスキルを見せてくれることになった。ウイズのスキルは相手がいないと使えないものばかりらしく、俺とカズマはスキルを覚えるために見る必要があるので、アクアがスキルを受けることになった。

「いいわよ?構わないわ、いくらでも吸ってちょうだい?」

アクアが、ひらひらと自分の手を差し出す。

その手をウイズがおそろおそろ手に取って…。

「で、では失礼します。…?あれっ?あ、あれっ?」

どうやらアクアがドレインさせないように抵抗しているらしい。

カズマが無言でアクアの頭をひっぱっていた。いいぞ、もつとやれ。

「痛いっ!?!ちよつとカズマ、邪魔しないでよ!これはリッチーと女神の戦いのよ!」
「話が進まないからはやくドレインされてくれ!」

「で、では失礼します…」

ウイズがアクアの手を握り、再びドレインタッチを行った。

ウイズの手……。いいなあ、俺がドレインされればよかったかも……。俺が……。ウイズにドレインされる……？

なんかエロ……。おっと集中集中。

気を取り直して。

ドレインタッチはアンデッド特有のスキルで、相手の体力や魔力を吸い取ることが出来るらしい。

そして、逆に自分の体力や魔力を分け与えることも出来るという。

ウイズのスキルを見た後、カズマが冒険者カードを確認するとそこには《ドレインタッチ》のスキルがあった。

カズマに続いて、俺も迷わずスキルを習得する。

「あ、あのアクア様？もう大丈夫ですよ、手を離して頂いて……。というか手がピリピリするので、そろそろ離して欲しいのですが」

「……」

見れば、アクアがウイズの右手を逃がさないように両手で包み込んでいた。

「ア、アクア様？あの、手が熱くなってきたんですが……。というか痛いですが、あの、痛いんですが！アクア様、私の身体がその、どんどん薄くなってきてるんですがアクア様、消えちゃう消えちゃう、私消えちゃいます！」

「何やってんだお前は」

「痛いー!」

カズマと俺が一撃ずつ入れると、アクアはやつとウイズの手を離れた。

「おい、ウイズ大丈夫か? あ、今覚えたドレインタッチが使えるかもしれないな…」

俺がウイズにドレインタッチで生命力を分けてみると、薄くなっていたウイズが戻ってくる。

結構重宝するスキルかもしれない。

と、その時だった。

「ごめんください、ウイズさんはいらつしやいますか?」

そう言いながら入ってきたのは、確か不動産業を営んでいる中年の男だった。

「「悪霊?」」

ということらしい。

最近この街の空き家に、なぜか様々な悪霊が住み着きまくっているのだという。

悪霊討伐のクエストを出して退治してもらっても、またすぐに新しい悪霊が住み着いてしまうのだとか。

実はウイズは昔、高名な魔法使いだった。なので、商店街の者は困ったことがあると

ウイズに頼みに来るのだ。俺も実際、何度か駆り出されているのを見たことがあった。

「ですがその…ウイズさん、今日はなんだか具合が悪そうですね。今日は特に顔色が悪いですよ？なんていうか、その…。今にも消えてしまいそうなの…」

俺とカズマが、先ほどウイズを浄化しようとしたアクアを見ると、ふいつと目を逸らして居心地が悪そうにソワソワしだした。

ウイズは幾分辛そうに笑いながらも、ポンと自分の胸を叩く。

…ポヨンと、ウイズの胸が少し揺れた。

「大丈夫ですよ、任せてください。街の悪霊たちをどうにかすればいいんですね？」

「ああ、いえ！全ての建物をどうにかしてほしいという訳ではなくですね…。その、例の屋敷を…」

「ああ、あそこですか。なるほど…」

ウイズが納得したように頷いた。…ああ、あそこか。

「では、任せてください。あの屋敷の中に迷い込んだ、悪霊だけをどうにかしますね？」
ウイズがそう言っただけで立ち上がり、やがて力が抜けたようによろめいた。慌てて立ち上がり、ウイズの身体を支える。

「ウ、ウイズさん、具合が悪いなら結構です、無理しないでください！」

カズマがアクアに顔を寄せ、何も言わずにジッと見た。

「わ、私がやります…」

耐えきれなくなったアクアが、小さな声で呟いた。

~~~~~

翌日。

俺とウイズは、カズマ達が住むことになった例の屋敷を訪れた。

なんでも、悪霊騒ぎを起こしていたのはアクアらしい。

前にウイズに代わり、墓場の霊の浄化をすることになったアクアがめんどくさがって墓場に結界を張り、行き場のなくなった霊たちが空き家に住み着いたのだという。

結局カズマ達は大家さんのご好意で、ある条件付きで屋敷に住むことになった。

ひとつは、冒険が終わったら、夕食の時にでも仲間と一緒に冒険話に花を咲かせるといふ、少し変わったもの。

そして、もうひとつは…

「よっ」

「カズマさんこんにちは！お墓の掃除ですか？」

草むしりをしていたカズマに声をかける。



「ああ、ライにウイズ。ウイズはもう大丈夫なのか？昨日は悪いな、うちのバカが迷惑かけて」

「いえいえ。むしろ、私たちとしてはこれでよかつたと思つてますから。これならきつと寂しくないでしょうし」

ウイズはそう言いながら、カズマに笑いかける。

カズマが屋敷に寄つてかないかと誘つてくれるが、店があるからと言つて二人で屋敷を後にする。

カズマが屋敷の庭の墓石を綺麗に吹くと、そこには『アンナⅡフイランテⅡエステロイド』と名前が掘つてある。

俺たちが振り返つて屋敷を見ると、二階の部屋から一人の女の子がびよんびよん飛び跳ねながら手を振つていた。

ウイズが言つたとおり、これで俺がたまに遊びに行かなくても寂しくないだろう。

俺はウイズは互いを見て、はにかみながらアンナに手を振り返した。

覚醒した眼魂：6個

ライが所持している眼魂：6個

## 第九話 夢のまた 夢

「これもですね…これも、アクア様が駄目にしちゃってます」

「まったくアイツは、いつもいつも…」

相変わらず客がちつとも来ないので、俺はウイズと一緒に商品棚の整理をしていた。

正確に言うと、アクアが駄目にした商品の廃棄作業をしていた。

アクアは水の女神で、液体に触ると自分の意志と関係なく浄化してしまう体質らしい。ついでに、触り続けていると聖水にまで出来るんだと。

と、本人が自称しているだけなので、本当かどうかはちよつと疑わしいのだが。

そんな感じでアクアが来ると、ポーションだのなんだのがいくつか駄目にされていたりするのだ。

「触るなって言ってるのに…」

忌々しげにいくつもの駄目になったポーションを見ていたその時。俺はある案を思いついた。

うーむ…もしかすると、この水に変えられたポーションを再利用することが出来るかもしれない。

そう考えた俺は。

「ウイズ、いいこと思いついた。これちよつとアクアんとこに持つてつてもいいか？」  
「はい？ いいですよ、気をつけて行ってらっしゃい」

そんな、優しい言葉をかけてくれるウイズを尻目に、俺は街へと繰り出した。

~~~~~

街の中は雪が積もっていて、人通りもさほど多くはなかった。

おそらくこの寒さのためだろう。なにも、用もなく寒さに身を晒すこともない。

こんな寒さの中、わざわざ外へ出るようなのは俺みたいに外出する理由があるやつか、よほどの暇人か…。

もしくは、俺の前方で不審な動きを見せている、俺の知り合いぐらいなものだろうな。俺は道の往来でココソコソしながら、路地裏を覗いている二人に声を掛けた。

「よう、キースにダスト。何見てんだ？ 何か珍しい薬草でも生えてるか？ それなら採取してうちの店にでも」

「うおっ!? お、おう…」

背後から声をかけられ、キースとダストが飛び跳ねた。

「なんだライか、驚かすなよ。あと、さすがに葉草はこの辺には生えてないと思うぞ…」
キースが俺を見て安心したように言ってくる。

「よう、あれか？今日はおっぱ…今日は一人か？」

おっぱい店主でも言いかけたダストが、俺に睨まれ尋ね直してきた。

「今日は一人だぞ。で、こんなところで何して…」

「よおっ！」

「「うおおっ?!?!」」

また突然声を掛けられ、キースにダスト、俺まで驚いて飛び上がった。

「なんだカズマか。驚かすなよ。まったく、これだから潜伏スキル持ちは、まったく…」

「悪い悪い。で、お前からこんなところで何やってんだ？」

カズマが、俺の聞きかけたことを代弁してくれる。

「あれか？お前も今日は一人か？」

ダストが、気にしたようにカズマの周りをチラチラ見ていた。

「今日は俺一人だよ。家にいるのも飽きたから、散歩してるんだ。アクアが内職の邪魔してくるしな。誰の借金だと思ってるんだか、まったく…」

カズマが愚痴り出す。こいつも普段から苦労してるんだらう。おっと、話がズレだしたな。軌道修正するか。

「で、お前らは結局ここで何してんだ？」

俺の質問に、キースとダストがこくりと頷き、周りに聞こえないように静かな声色で言った。

「カズマ、ライ。この街には、サキュバス達がこつそり経営してる、良い夢を見させてくれる店があるって知ってるか？」

「詳しく」

俺とカズマはダストに即答していた。

~~~~~

「なあ、聞いたか？最近この辺に緑色の目をした仮面ライダーが出没してるんだと。しかもなかなかの強敵で、あのミツルギも負けたんだとか」

「ミツルギって、あの魔剣の勇者ミツルギか？そりや俺たちの手に負えるもんじゃねえな、ただでさえ冬で良い仕事かねえつてのに、しばらくクエストは控えるに越したことはないか……」

俺はギルドの机に座り、ダスト達を酒を飲んでいた。

そこまで得意な方じゃないから、飲むと言ってもほんとにチビチビだが。

緑色の目をした仮面ライダー？

俺の他に仮面ライダーがいるっていうのか。

なんだろう、凄く気になる。

「で、サキュバスのお姉さんの話をそろそろ」

「そう急かすなつて。いいかお前ら、この話は他言無用だぞ。特に女に対してはな」

早々にジョッキ一杯分を飲み切ったカズマが急かすと、ダストが顔を近づけて話し始めた。

俺とカズマが静かに頷く。

「この街にはサキュバス達が住んでるんだ。つていうのも、サキュバスつてのは男の精気を吸って生きる悪魔だろ？つてことは、当然彼女たちには人間の男が必要不可欠だ」

ダストに続けるように、キースが口を開いた。

「ほら、俺たちは基本馬小屋暮らしたろ？そしたらほら、いろいろ溜まって来るじゃないか。でも、周りには他の冒険者達が寝てる。ムラムラ来たつてナニすることも出来やしないだろ」

「そうだな」

カズマが同意する。こいつはちよつと前までアクア達と馬小屋暮らしたたから、尚更分かるんだろうな。

「で、さっきのサキュバス達の出番だ。こいつらが、俺たちが寝てる間に良い夢見させてくれるってわけだ。俺たちはスツキリできて、彼女たちは生きていける。この街では、そんな共存共栄の関係が築かれてたってわけだ」

ダスト達の話聞いて、俺はただただ感心していた。

これならサキュバス達が人を襲う必要もなくなるし、男達も危ない橋を渡る必要もなくなるだろう。

なんて素晴らしい関係なんだ！

そんな俺達を見て、ダストが言った。

「実はその店の事を教えてもらったのって、俺たちも最近なんだ。それで今日初めてその店に行こうとしたところでお前たちと出くわしたってわけだ。どうだ？ お前らも一緒に行かないか？」

勿論俺たちも乗っからせてもらおうことになった。

~~~~~

先程の路地裏に戻ってきた俺たちは、そこにある小さな飲食店に入った。

「いらっしゃいませー！」

それは一見ただの店だが、一度中に入ると、多くの男の理想を具現化したかのような、魅惑の身体をした女性の出迎えを受けた。

中には不自然なくらいに男性客しかおらず、その客達は皆テーブルで何かの用紙に一心不乱に何かを書いている。

俺たちは空いてるテーブルに案内され、サキユバスのお姉さんがアンケート用紙を渡ししてくれる。

「お客様は、こちらのお店は初めてですか？」

用紙を受け取りながら、俺たちがこくりと頷くと。

「では、ここがどういうお店で、私達は何者かもご存知でしょうか？」

俺たちは再び無言で頷いた。

そこまで聞いたお姉さんは、テーブルにメニューを置く。

「ご注文はお好きにどうぞ。何も注文されなくても結構ですよ。∴そして、先程渡したアンケート用紙に必要事項を記入して、会計の際に渡してくださいね？」

アンケート用紙に目を落とすと、『夢の中の自分の状態、性別と外見』と書いてある。首を傾げる俺を見て、お姉さんが説明してくれた。

「夢の中では王様や英雄になつてみたい、等があれば記入していただければ。性別や外見というのは、たまに、自分が女性側になつてみたい、というお客様がいらつしやいま

すので」

なるほど。そんなことまで設定出来るのか。

そっか、夢だもんな。

キースがおずおずと、お姉さんに質問するように片手を挙げた。

「…あの、この相手の設定っていうのはどこまで指定できるんですかね?」

「どんな所までも、です。性格や口癖、外見やあなたへの好感度まで、何でも、誰でもです。実在しない相手だろうが、何でもです」

「マジですか」

「マジです」

すげえなサキュバスサービス。他の店とは比べものにならないじゃん。

「ただ、出来ればお酒等は控えてくださいいね? 泥酔されて、完全に熟睡されていると、さすがに夢を見させることができませんから」

俺たちは会計を済ませ、そのまま解散することになった。

「おかえりなさい、ライさん! 見てくださいこれ!」

家に帰ると、いつになく機嫌の良いウイズが出迎えてくれた。

ウイズは機嫌はいつでも良いが、というより何やらテンションが高い。

食卓を見ると、そこには豪華な厚切りのステーキと、高そうなお酒が置かれていた。

「三人前の白毛洋牛とお酒を、商店街の福引きでゆんゆんさんが当てたらしくて！一緒に食べようって持つてきてくれたんですよ！」

見ると、料理が置かれたテーブルの隅でゆんゆんが恥ずかしそうにしていた。気付かなかつた…とは言わないでおこう。

「…急にお邪魔してしまつてすみません。一人じゃ食べきれないし、せつかくだから食べてもらえれば、と思つて…やっぱり迷惑でした？」

ゆんゆんが小さな声でそう言い、俺の顔をうかがってくる。

「迷惑なわけないだろ。来てくれて嬉しいよ。凄くありがたいんだけど、その…料理は…」

俺はゆんゆんにかける言葉に詰まり、助けを求めようとウイズを見た。

俺は今ゴーストだ。眼魂のおかげで身体機能はほとんど元と変わらず動いているんだが、何かの拍子に透過したりすると、消化途中のものがそのまま身体を透けて落ちてしまうことがわかつていた。

なら透過しなければいいんじゃないかと思うのだが、この前そう思つて食べたいだけ食べたらず、寝てる間に透過してしまつたらしく、翌朝シートが消化途中のドロドロの食べ物達で大惨事になっていた。

幸い、食べなくてもお腹が空くことはないのもそれ以降飲み食いは避けていたんだが
：

「せっかくゆんゆんさんが持つてきてくれたんですし、今日くらいいいんじゃないですか？」

普段より顔色のいいウイズが、そう言ってくる。

俺はしばし考えた後。

「そうだな、頂くよゆんゆん」

俺がそう言うと、ゆんゆんはとても嬉しそうな顔をした。

「「いただきまーす!」」

「なにこれ!うまつ!」

白毛洋牛のステーキを頬張った俺は、思わず声を漏らしていた。

それくらい美味しい。やばい、箸が止まらない!

「それはよかったです…!」

ゆんゆんが安心したような表情をみせる。

「んっ…これも美味しいですよ!ほら、ゆんゆんさんも!私が注ぎますから!」

「え、あつえつと…ありがとうございます…」

ウイズに酒を注いでもらったゆんゆんが、いくらか迷いながらもおつかなびつくりそれを口にする。

酒を飲むのは初めてなんだろうか？

どうも、ゆんゆんはめぐみんと同年代の14歳らしいと、先日聞いて驚いた。発育の差は、こんなにも人間に違って見せるものなのか。

初めての酒の味をどう感じたのか、ゆんゆんは少し微妙な顔をしていた。

「さあ、ライさんもー」

「ありが…」

ウイズに酒を注いでもらいかけ、寸前で思い留まる。

あぶねー、俺は酒に弱いから、少しでも飲んだら夢は見られなくなってしまいそうだし、流石に酒はやめておくれよ。ほら、こんな時間に飲んで、もし寝てる間に透過しちゃったら大惨事なんてもんじゃないだろ？」

「そうですか、残念です」

そう言ったウイズは酔ってきたのか、ゆんゆんにしきりに酒を勧めはじめた。もう少し見たい気もするが、今日はちよつと早めに寝ておきたい。

俺はステーキを完食し、立ち上がると。

「ゆんゆん、ごちそうさま。凄く美味しかったよ。今日はちよつと疲れちゃってさ、悪い

けどもう寝ることにするよ。二人ともおやすみ」

そうやって食卓を後にした。

背後からゆんゆんの「やっぱりほんとは迷惑だと思つてたんだ」という泣きそうな声
が聞こえてきた気がしたが、今日は幻聴だと思つておこう。

そうして布団に潜つてから、一時間くらい経つ。

俺は妙にドキドキしてしまい、眠れなくなっていた。

そもそもゴーストだから普通は寝ないんだが、ウイズが睡眠薬の代わりに、ゴースト
でも眠れるようになる魔道アロマ機を入荷してくれたので、最近はそれを焚いて眠るよ
うにしていた。なので気付けば部屋が煙だらけなのだが。

それでも今日は眠れる気がしない。

どうしよう、指定した時間までに眠らないとサキユバスの人に迷惑がかかってしま
う。

俺は改めて目を閉じ、眠れることを祈りながら羊を数え始めた。

どのくらい時間が経つただろうか。

「羊が3561匹、羊が3562匹……」

一心不乱に羊を数えていると、わずかに扉が開く静かな音がした。

もうサキュバスが来てしまったのだろうか。扉は再び閉められ、煙の中に誰かの影がうつすらと見える。

「んー……」

「え……?」

扉を開けて部屋に入ってきたその影が、俺の入っていたベッドに身を投げってきたのだ。

そのまま布団に潜り、俺の隣に寝転がる。

顔が間近にきて、それがゆんゆんだということを確認することが出来た。

「……というか顔が近い!」

「スースー……」

穏やかな表情で眠るゆんゆんの吐息が、俺の顔に微かに当たる。

どれくらい飲まされたのだろうか。少し酒の匂いがした。

それより、何故ゆんゆんがここに?泥酔して、ウイズに泊まってけと言われて部屋を間違えたとか。それは都合良すぎるか……

……わかった、これは夢だ。俺は実はとつくに眠っていて、サキュバスに夢を見せられ

ているんだ。そう考えれば納得がいった。

というか、なんでゆんゆんなんだ？俺は美人で胸が大きなお姉さんをアンケートに書いたはずだが。

確かに、美人だし胸は大きいが、ゆんゆんは年下だ。

いや、少し前まで同年代だと思っってしまったから、その影響かもしれない。

ともあれ、せつかくの夢だ。楽しませてもらうとするか。

そう思った俺は、隣で添い寝してくるゆんゆんに手を伸ばした。

ゆんゆんの服越しに、俺の手にその柔肉の感触が伝わってくる。これが…物心ついて、初めて触る女性の胸の感触。

なんだろう、思ってたより堅いな。あつ、これブラ入ってるのか。

ゆんゆんはさつき見たままの服装だった。さつきウィズに酒を飲まされて酔ったゆんゆんがそのまま俺の部屋に…というシチュエーションなんだろう。

それにしても、眠ったままなのがすこし残念だな。勝手に進めていたら起きるだろうか。

そう思った俺が、緊張で震える手でゆつくりとゆんゆんの服を脱がせていくと、ゆんゆんの上半身を守るものは薄い黒地のブラジャーのみとなった。

「う…ん。…ライ、さん…？」

身体が火照ってきたので俺も服を脱ぎ、更に脱がせようとしたところでゆんゆんの目がうつすら開き、眠たそうで、どこことなく色気のある声で俺の名を呼ぶ。

「ああ、やっと起きたか。さすが夢だな、タイミングが完璧だ。さて、可愛い反応を心行くまで拝ませてもらうとするかな」

「え……ええ!!? ライさんなんで……!? ちよつとあの、だつていきなりこんな」

少しきよろきよろして状況を理解し、頬を赤らめて驚いているゆんゆんを抱き寄せた俺は、その耳元で呟く。

「静かにしてくれ、夢の中とはいえウイズを起こしたりしたら不味いだろ? ほら、続けるぞ」

そのままゆんゆんの背中に手を回した俺はブラのホックをなんとかスムーズに外すことができ、ゆつくりとその布をゆんゆんの肌から遠ざけていく。

その美しくも綺麗な上半身が余すことなく露わになった。

顔を真っ赤にしたゆんゆんは両腕で自らの胸を隠すが、隠す対象が大きすぎて全く意味をなさない。

「ライ……さ……んっ」

俺はゆんゆんの腕をゆつくりほどいていき、大きく実った果実を外側からなぞるように、優しく、その中心にゆつくりと指を向かわせる。そこに指が当たると、ゆんゆんの

身体がピクつと痙攣し…

「ら、『ライトニング』ッ！」

そこまでいって、ゆんゆんが突然魔法を放った。

その魔法は、俺の肩を掠め。

客に指定された住所に来たものの、何かが勝手に進行していて困惑していたサキュバスの頬も掠めて、窓ガラスを割っていったー

なんとということでしょう。

「あ、あなたはサキュバス！さっきから何かライさんの様子がおかしいと思っていたら、あなたの仕業だったのね！」

ここにサキュバスがいるってことは、

「あ…えつと、」

俺はまだ夢を見ていたわけではなかったようだ。

「あなただけは絶対許さないわ！我が名はゆんゆん！紅魔族随一の上級魔法の使い手にして、やがて村の長となる者！大方ライさんを狙ってきたんでしようけど、この私がいのが運の尽きね！私がここで断ち切ってあげるわ！」

サキュバスに話す暇も与えない、今まで見たゆんゆんの口上の中で一番勢いに溢れた名乗り。どうやら俺が狙われたと思ひ込み、怒りで我を忘れているようだ。俺を庇うようにサキュバスと対峙する姿は、最高にカッコよかった。

「あの…せめて服を…」

ただ、上半身裸でなければ。

「え?…きやあああああああああ!」

サキュバスに指摘されて自分の状態に気付いたゆんゆんは飛ぶように俺の布団の中に隠れ、己の肌を隠しながら俺によって脱がされた服を回収していく。

「あなた、もう許さないんだから!」

「私のせいじゃないですよね!」

ゆんゆんが上半身裸だったのは俺のせいだが、服を着直したゆんゆんは更にサキュバスに敵対心を露わにし、魔法を放とうとする。

「問答無用! 『ライトニン』 ツ…!」

サキュバスに飛ばしかけた魔法は、咄嗟に前に出てサキュバスを庇った俺によって中断された。

「ライさん、退いて下さい! その子はサキュバスです! ライさんに悪いことをしに来た悪魔なんですよ!…まさか、ライさんはもうサキュバスに操られて!」

「ちよ、お客さん!？」

何か都合のいい解釈をしてくれようとしていたので、俺はサキユバスを庇つたまま思いきり領いた。冤罪が増えたサキユバスの悲痛な声が背中から聞こえてくるが、許せ。「なんて非道な…あのサキユバスさん、とりあえず、せめてライさんに服を着せてあげてください…」

そう言つてゆんゆんが目を逸らす。おつと、俺も今裸でした!

「ライさんどうしたんですか?何か騒がしいですけど、大丈夫ですか?開けますよ?いいですか?」

この騒ぎで起こしてしまったのか、ウイズの声が扉の向こうからしたと思うと、扉が開く。くそ、どうすればこのサキユバスを逃がせる!

その瞬間、ゆんゆんの魔法によって割られた窓を見つけた俺は。

「そこだ、今すぐそこから逃げろ!」

ウイズが状況を確認する前に、素早くサキユバスをそこから脱出させた!

「ゆんゆん悪かつたつて!あれはサキユバスのせいなんだから仕方ないだろ!?!ていうか抵抗しないゆんゆんもゆんゆんじゃないか?」

「確かに流されそうになった私も悪いですけど！まさか、あんなこと……」
翌朝。

ウイズに説明を迫られるも、黙秘を貫き通したゆんゆんに出来る限りの謝罪を見せ、やっと口を聞いてくれるようになった。

「……秘密ですからね」

「え？」

「き、昨日のことは！私とライさんだけの秘密ですからね！」

「あ、ああわかった、約束するよ」

俺とゆんゆんの中に沈黙が走る。

どうしよう、やっぱ気まずい。

静寂に耐えきれなくなった俺は、朝食の目玉焼きにフォークを刺すと、

「キュー……」

活きのいい目玉焼きの最後の叫びが、この静寂を破ってくれた。

……目玉焼き、ナイス。

「ところでライさん、昨日は何しに外に出たんですか？」

「あつ」

忘れてた。

覚醒した眼魂：6個

ライが所持している眼魂：6個

第十話 ピンクの悪魔

サキュバスの騒動の翌日。

俺はめぐみんに誘われて、カズマ達のパーティに臨時で入り、朝はやくからゴブリン退治に駆り出されていた。

ちなみにカズマの所は、アクアが張っていた結界にサキュバスが捕まり、間一髪のところカズマが逃がしてやったらしい。

今度サキュバスサービスを頼む時はカズマと一緒にどっかの宿に泊まることにしよう。

そして、何故俺がめぐみんから招集を受けたかと言うと。

「すごいです！ほんとに浮いてます！想像以上に楽しいですこれ！」

俺はめぐみんを背中に乗せ、浮遊していた。

なんでも、めぐみんが俺に乗って上空から爆裂魔法を放てば、射程を気にする必要もなくなるし、隠れている敵も見つけやすいと思いついたんだと。

思い立ったらすつかり我慢出来なくなってしまうたらしく、朝イチで食卓に飛び込んできた。ついでに、ゆんゆんに勝負を挑まれて泣かせていった。無慈悲である。

「頭いてえ…」

「うう…寝不足で視界がはつきりしない…」

カズマとダクネスは昨夜サキュバスの件でいろいろあったらしく、あまり眠れていないらしい。聞いた話では、一緒に風呂入ったとか。それだけなら俺よりマシじゃないか？とも思えてしまうが、死んでも口には出さない。昨夜のことは俺とゆんゆんだけの秘密のまま墓場まで持っていかせてもらおう。

「ねえライ、めぐみんのワガママを聞いてもらつてるとこ悪いんですけど…」

そんな考えを巡らせていると、アクアが俺の足元から話しかけて来る。

アクアはめぐみんを背負って浮遊する俺を見上げながら。

「もうちよつと高く飛んであげることが出来ないのかしら…?」

地上50cmほどだけ浮いている俺に、そんなことを言ってきた。

「そうですね。もうちよつと高さがないと、歩いてるとあまり変わらない気がします」

背中のみぐみんもそう言ってくる。

「悪いが、これが限界だ。ていうか今ですら結構つらい。どうやら筋力や体力と浮力は別物らしいな…」

「そうですか、それは残念です。今後、もっとレベル上げてステータスが上がったらまたよろしくお願いします」

ちよつと残念そうな顔をして、めぐみんは俺の背を降りる。

「さて、と。ゴブリンの目撃情報はこの辺なのですが。あつ、そこから岩場ですね。カズマ、敵感知をお願いします」

めぐみんの指差す方を見ると、平原と岩場の境目が見える。

「え？めぐみんもダクネスに背中流されたいって？女同士なんだからそれくらい帰って本人にやってもらえよ」

「誰がそんなことを言ったのですか、敵感知スキルを使つてくださいつて言ったんですよー！」

「ああ…」

カズマは普段から徹夜には強いと言っていたはずだが、アクア達に袋叩きにされたの

がよほど応えたのだろうか、先ほどから生返事ばかりでなかなか会話が成り立たない。

「敵感知敵感知…ん？ほんとにここにゴブリンがいるのか？何も引つかからないが…ん、一体だけ何かが敵感知に引つかかっているな、かなり強敵の気配がするが」

敵感知スキルを発動させたカズマがそんなことを言う。

「一体だけですか？それなら初心者殺しでしょうか。あのモンスターはゴブリンを餌に低レベル冒険者を狩りますから」

「いや、そんなちやちなもんじゃない。前に戦った、ベルディアに匹敵するくらい…いや、下手すればもつと強そうな強敵の気配が…」

ベルディアとは、以前俺が店番をしている間にカズマ達が討伐したという魔王軍幹部。もちろん相当強かつたらしい。それに匹敵するとなれば…

自分で言つててことの重大さに気付いたカズマが、徐々に顔を引き曇らせてくる。

「おいお前ら、やっぱ帰るぞ！まだ正体がわかったわけじゃないが、敵感知に引っかかるってことは少なくとも現時点では俺たちの敵なわけだ！この前は運良く倒せたが、そう何度も魔王軍幹部と渡り合えるとは…おい聞けよ！」

「それほどの強敵ですか…いいでしょう！ベルディア戦では私がベルディアに直接攻撃を加えることはなかったのですが、今度こそ魔王軍幹部レベルの強敵をこの手で屠つてやります！」

そう威勢よく言うと、大きな岩の影から飛び出すめぐみん。

「その強敵が繰り出す攻撃とは、どのようなものなんだろうか…！いい、いや、そんな危ないものを放置しておくわけにはいかないだろうカズマ！ああそうとも！冒険者として、街の人々を守るために戦うべきではないか！行くぞ諸君！」

そうして顔を火照らせながらいそいそとめぐみんに着いていくダクネス。

…カズマも苦労してんだな。

出ていってしまった二人を見てため息を吐きつつも、自分だけ逃げようとするアクアを引きずって岩の影から顔を覗かせたカズマ。俺も岩場から身を乗り出して様子を見てみると。

「あなたは…」

「ピンクの、仮面ライダー…?」

無数のゴブリンの死体。その真ん中にある背中を見て、めぐみんとダクネスが固まっていた。

「ピンクじゃない、マゼンタだ」

ピンク…いや、マゼンタの仮面ライダーはそう答え、こちらを振り向いてくる。その顔は黒い縦線がいくつも突き出るような形に、緑色の目。腰にはこれまたマゼンタ色のベルトが巻かれている。

緑色の目：

なんだろう、最近そんな噂を聞いた気が…そうか!!

「二人とも下がれ！」

その仮面ライダーについての情報を思い出した俺は、二人を庇うようにそいつの前に飛び込み、ゴーストドライバーを召喚して眼魂を構えた。

「お前が最近冒険者を襲ってる仮面ライダーだな？」

「さあ…なんのことだか」

マゼンタの仮面ライダーはわざとらしく頬に手を当て、思案するような仕草を取った。

「とぼけるな！変身！」

『開眼！オレ！レッツゴー！覚悟！ゴゴゴ・ゴースト！』

オレ魂に変身した俺がガンガンセイバーで横薙ぎの一撃を繰り出すと、マゼンタの仮面ライダーはバックステップで回避し、四角い銃で俺を狙撃してくる。すかさず浮遊し、銃撃をやり過ごす。

こちらも上から狙撃し、それを奴が避ける隙を狙って懐に飛び込んで突きをいれるが、刀身を抱え込まれ、逆に四角い剣で腹にダメージを食らう。

『KAMEN RIDE KUUGA』

剣や銃になる四角い箱からカードを出した仮面ライダーはベルトの端を引き、カードをバックル部分に入れると端を押し込んだ。機械音が鳴り、奴の姿が全く別の、赤い筋肉質なものになる。

俺の放った銃撃をかくぐり、急接近して強烈なパンチを放つ。

フォームチェンジか…それなら。

『開眼！ロビン！ハロー！アロー！森で会おう！』

ロビン魂になった俺は奴と距離を取り、ガンガンセイバー 弓モードで狙撃。矢が当たり、ダメージを負った奴は新たなカードをバックルに入れた。

『FORM RIDE KUUGA DRAGON』

紫色の姿になった奴は剣をを振り回し、俺の矢を弾きながら接近してくる。俺は三人に分身し、三方から矢を撃つが全て弾かれた。ロビンじゃ相性が悪いことを悟った俺は、眼魂チェンジをする。

『開眼！ベンケイ！アニキ！ムキムキ！仁王立ち！』

『KAMEN RIDE OOO』

俺がベンケイ魂になると同時、その仮面ライダーは新たな姿になった。頭部が赤、

胸部が黄色、脚が緑の派手な姿だ。俺がガンガンセイバーハンマーモードを振ると、奴はそれを避けて腕の爪で俺の腹を抉ってくる。

「がっ…!?」

「どうした? もう終わりか?」

奴の挑発に、俺は姿を消して奴の背後に回り込み、懐からハンマーで一撃を叩き込んだ。弾けたように飛び、その身体が大きな岩に激突する。

「やったか…!?」

しばらくして砂煙が収まると…そこに奴の姿はない。

どこに行った…!?

「上です!」

めぐみんの声に、頭上を見上げれば奴が目前に落下してくる。異型に変化していた脚で着地すると、鋭い爪でアツパーを加えてきた。

俺はたまたまず数メートル飛ばされ、踏みとどまる。

『ATTACK RIDE OOO』

機械音と共に奴は剣を召喚し、こちらに大きく振りかぶってくる。

間一髪のところでは避けると、背後から何かの呻くような声がしてきた。

それは、生き残っていた一匹のゴブリン。

ゴブリンを真つ二つにした斬撃は周囲の木や岩をも切り裂いたかと思うと、斬撃の後に沿って空間さえ真つ二つに。

かと思いきや、斬れたはずの空間が元に戻り、巻き込んだゴブリンだけを爆殺させた。

その威力に、傍から見ていたカズマ達をも震え上がらせる。

とてつもない力を前に呆然としていた俺は、気付けば奴に問いかけていた。

「お前は一体…」

「通りすがりの仮面ライダーだ、覚えておけ」

「通りすがりの…仮面ライダー…」

「ねえやっぱりあなた本物!? 本物のデイケイド?」

急にアクアが俺とマゼンタのライダーの間に入ってきて、向こうに話しかける。

「おい馬鹿戻ってこい! 今の攻撃見たろ、お前じゃ耐えきれない…つてお前この通り魔ライダーのこと知ってるのか!」

「もちろんよ! 彼は世界の破壊者仮面ライダーデイケイド、門矢士。私達女神を介さなくても自由に平行世界を行き来できちゃうとんでもない人なの! 私も初めて会ったわ

！

「そういうことだ」

アクアの嬉々とした説明とともに、デイケイド：門矢士が変身を解く。

「世界の破壊者ですか！なかなかいい二つ名をお持ちで」

「そいつはどーも。ただ通り魔ライダーはいただけないな」

「通り魔は通り魔だろ。お前のことだろ？最近出沒してる、緑の目をした仮面ライダーってのは」

「だからなんのことだ？俺はたまたまここを通りすがっただけだし、冒険者とやらを襲った覚えはないぞ。第一、俺だったとしたら緑じゃなくてピンクの、と伝わるはずじゃないのか？」

「あ…」

「言われてみればそうですね」

「そういうことだ。ま、せいぜい頑張れよ。仮面ライダーゴーストくん」

「おい、まだ話は終わって…」

身を翻した門矢士はあつという間に茂みの方へ行ってしまった。

「なんだったんだあいつ？」

「あんな攻撃を受けたら、一体どんな感覚に襲われるのだろうか…」

「腹を世界ごと斬られる感覚だと思う」

とりあえずゴブリンは門矢士に倒されてしまったので、仕方なく受付のお姉さんにそのことを話したところ、これは別に問題ないんだそうだ。ちゃんと報酬を貰い、今日のところは魔道具店に帰ることにした。フォームチェンジを繰り返したせいかな、魔力を消費しすぎて身体が重い。おのれデイケイド…

「ただいまー…!？」

「なんだ、さっきのゴーストくんじゃないか」

俺が家に戻ると、店内の椅子に腰掛け、我が物顔でお茶を啜るその男。

「ライさんおかえりなさい！なんだ、ライさんのお友達だったんですね！どうぞ、粗茶ですが」

「いやどうも」

「門矢士！なんでお前がここに!？」

「なんでって、店の商品見に来たに決まってるだろ。ほら、オススメを教えてくださいよ店員さん？」

門矢士はそう言って手に持ったポーションをこちらに見せてくる。

そういうことなら仕方ない…おっとこれは。

「なかなかお目が高いじゃないか、それは飲むと一定時間笑いが止まらなくなるポーションだ。試してみるか？」

「よ、よりによつて笑わせてくるポーションだったか…じゃあこっちは？」

「そつちはいつでもどこでも子供のあとを延々とついて行く人形です。これで迷子になる心配はありません！どうですか!？」

「お、おう…悪いがストーカーは間に合ってるんでな…もう少しまともな商品はないも

のか…」

「まともじゃない奴に言われる筋合いはないんだが…」

門矢士は特に何も買う様子もなく、店を出ようとす。

「なんだ、何も買わないのか？」

「まあな。これからやることもある。お前達だって、そうのんびりしてる場合じゃないんじゃないか？」

門矢士がそう言うのもつかの間、

『デストロイヤー警報！デストロイヤー警報！機動要塞デストロイヤーが、この街に向かって接近中です！冒険者各員は、装備を整えてギルドへ！街の皆さんは、直ちに避難して下さい！！』

「ほら、な」

いつの間にかこの街に危機が迫っていた。